

# 大阪市立自然科学博物館館報

2



大阪市西区靱 2 丁目52

大阪市立自然科学博物館

---

## 目 次

研究と展示	1
1. 沿 革	5
2. 現 況	5
3. 職員および人事	5
4. 庶務報告	7
5. 収集保管事業	8
6. 調査研究事業	24
7. 展覧事業	31
8. 普及指導事業	36
9. 自然科学博物館条例および規則	38
附 大阪自然科学研究会	39

---

# 研 究 と 展 示

学 芸 係 長 日 浦 勇

大阪市立自然科学博物館の看板ができたのは古いけれども、正式の館屋と複数の学芸員をもって実質上誕生したのは昭和33年1月のことであります。それ以来、試行錯誤をくりかえしながら、丁度10年の才月がたちました。この間、私たち学芸員が悩みつづけ、そして今もって解決されない最大の問題は、学芸員の研究について、博物館の展示について、とくに研究と展示の関係についてであります。私は昆虫学の研究者として10年間、展示担当者として9年間、私なりにこの問題を考えてきましたし、僚友学芸員と意見の交換を行ってきました。その結果、最近になって考えが少しずつ固ってきたので、のべてみたいと思います。

はじめに、以下に申すことは、日本的な標準からいえば中型の規模で、地方公立で、自然史部門だけを扱う博物館を問題にしていることをお断りしておきます。一般論ではありません。

## 1. 展 示 の 理 念

いままで「展示」が日本の博物館人のあいだで問題にされる場合は、採光や照明とか、陳列品は床面からどのくらいの高さにおくか、とか、ラベルの字数とか、室内での観覧者の流れ、とかいった技術的な話題に重点がおかれていたように思います。しかしながら、こうしたテクニックよりもっと大切なのは、展示室に豊かな内容が盛られているかどうかであり、さらに展示内容よりもっと大切なのは、その博物館が展示室において、観覧者に何を語ろうとしているか、その姿勢というか、意図というか、理念というものでありましょう。

わが国の、とくに自然史関係の博物館は、欧米にくらべ、立れ遅れた貧弱な存在であります。これから充実してゆかねばなりません。貧弱であるだけに尚更、技術よりも内容、内容よりも理念について討議が深められるべきであるし、その理念を実現させるための展示内容、内容をしうまく語らせるための展示技術、といった理解がなされるべきです。この点での暗黙の諒解のもとに技術論が横行しているのではなく、理念不在の（理念タナ上げの）展示論をやっているように私は感じております。このような末梢の論議を100年つづけても、日本の自然史博物館は成長できる筈はありません。

## 2. 理 念 の 形 成

次に館の展示理念がどう決められるか、を考えてみたいと思います。まず第1に設置主体が何であるか、私立か国立か、公立か法人か、教育委員会の所管か観光課の管理か、によって大きな枠がきめられる。金もうけが「理念」であったり、蒐集物を見せびらかしたい意図が「理念」であったり、税金をごまかすことが「理念」であるような博物館もありうるわけです。文化遺産の伝承とか、国民の知的水準の向上とか、地域社会への奉仕、といったことが大きな問題になるでしょう。第2に設置場所——大都会か衛星都市か、地方の中心都市か田舎町か、辺地か観光地か、第3に館の守備範囲——総合博物館か自然史館か、水族館か、等が大きな規定要素になるでしょう。



さらにその上に、運営する人々の意図が加わります。これには経営者・館長・博物館協議会等の、いわゆる理事者の経営方針がうまく織りこまれるでしょう。そして最後に、学芸員の意志が入りこむわけです。

経営者の抱く理念と学芸員の抱く理念とは、当然くいちがっております。両者の関係を、組織の理念と個人の意向という、対立する存在としてとらえるとどうなるでしょうか。

①博物館に明確な理念なく、展示の意図が曖昧、漠然としており、理事者はその向上充実に熱意を示さない。そこに勤務する学芸員は研究能力なく、研究意欲ももたない場合——この場合は申すまでもなく救いようのない、最低の博物館であります。

②経営者・理事者が明確な理念を抱いており、その実現のために予算等も確保し、積極的であるが、学芸員に研究意欲が乏しい場合——館側のひきまわしが強く、展示内容は教科書再演的になり平板で、魅力や個性に乏しいものになると思われます。

③理事者は理念に欠けるが学芸員の研究意欲旺盛な場合——展示を構成する各テーマの間の有機的連関は失われ、独断的で分裂症的な展示となり、観客への説明力が弱まり、社会的存在としての館の能力も弱まり、学芸員各人の研究は、博物館人としての研究というより、いわば無国籍的な性格を帯びてくると思われます。

④理事者は明確な理念をもち、その実現を裏付ける体制をつくり、予算も準備している。一方学芸員も旺盛な研究意欲とつよい個性をもっている——相剋・斗争ははげしいが、この場合だけが素晴らしい展示と研究がのぞみうるのではないのでしょうか。

### 3. 学芸員の研究テーマ

研究意欲と展示活動への意欲を同じものとして話をしてきましたが、双方の関係を改めて考えてみたいと思います。

①学問の研究というものは、量の多少や程度の高さに差はあっても、先人のあげた業績を超えて、その上にさらに新しいものを積みあげてゆく作業であります。そのために自然への洞察力がみがかれ、独自のものの考え方が出来上り、学識が深まってゆきます。研究者である学芸員が展示活動を行う意義は、まさにここにあります。解説屋でもなく、科学評論家でもない、研究者としてのオリジナルなものの見方——自然観というか、世界観というか——において展示はなされねばなりません。したがって、研究者としてすぐれておればおるほど、高い学識・深い洞察力・オリジナルな自然観をもつのであり、そのような優秀な学芸員の行う展示は、同時に素晴らしいものになるわけです。ここに博物館において研究活動が活発に行われねばならない必然性があると思います。

②次に各学芸員が研究者としてどう生長してくるかを考えてみましょう。

大学を終えた人は2年位、大学院の博士課程を出た人ならば7年位の研究歴をもっていて、その後博物館へ来る。彼は就職した時点で、すでに独立した研究者であり、彼独特の研究対象（動物とか魚類とか、淡水魚とかコイ科とか）と研究方法（分類学とか生物地理学とか、比較形態学とか）をもっているわけです。かりに大学を出ていない学芸員でも、独学の専攻テーマを抱いているからこそ博物館に身を投じるわけです。

専攻分野というのは研究を始めて間もない青年の場合にはなはだ狭いもので、したがって彼の研究は直接展示活動とつながらないことが多い。同時に彼の抱く自然観は、構造地質学の世界観であ

ったり、裸子植物分類学的なものの方であったりして、必ずしもバランスのとれたものではないでしょう。そこで博物館員として要請される仕事の巾や性質との懸隔がとても広く感じられ、困惑することになります。

④自分のテーマと館の方針との矛盾をどう解決するか、博物館という職場で研究をどう伸ばしてゆくか。この処理法は、各学芸員の資質、個性、経歴、ものの考え方、思想、等々がからむので、いろんなケースがあります。

第1の場合は、はじめから調和をあきらめ、自分の研究テーマはそのままおし進め、一方ではそれと無関係に、断絶した形で展示等の館の仕事をやっけてゆこうとする場合。

第2の場合は、館の活動と調和するように、自分の研究テーマを徐々に変えてゆこうとする場合。

第3の場合は、従来の研究テーマの他に、それと併行して館の仕事とマッチした研究テーマを新しく持とうとする場合です。

例をあげましょう。当館学芸員が館に就職した時点での主テーマは次のようでした。

- 学芸員A：富山盆地第三系の微化石層序
- 〃 B：西南日本外帯の地史
- 〃 C：近畿地方シダ植物相
- 〃 D：日本産両生・爬虫類の分類地理
- 〃 E：ハナカメムシ科の分類
- 〃 F：キジラミ科の系統分類

これらのテーマはどれをもっても、そのままの形で大阪市立自然科学博物館の展示なり普及活動に結びつき、館員として研究がスムーズに進められそうなものはありません。にもかかわらず、これらの主テーマを就職後に放棄した者は一人もいない。これは片面では、個人の選んだ研究テーマというものは、実に根深いもので、容易に変更できるものではないことを示しています。と同時に、反面では博物館で研究を進めることが、日本の現状ではきわめて困難なことを物語っています。何故なら、研究スタッフが何十人も何百人もいる場合の1人としてこれらA～Fのテーマを考えれば、実にふさわしいテーマであると考えられるのに、1人で1分野を受持たねばならぬ当館の現状では、A又はBが地学の、Cが植物学の、Dが動物学の、E又はFが昆虫学の担当者である場合、いかにも偏ったテーマといわざるをえません。そこで学芸員Aの場合は、サブテーマとして「段丘・沖積層の有孔虫」と「近畿地方の後期新生代層の旧象化石による分帯」を持とうとして、いずれも成功を見ております。両テーマに共通するのは、大阪という土地と直接結びついていることと、新しい時代のものであることとであります。この成功例が問題解決の方向を暗示しておると考えられます。

これは学芸員の研究テーマの解決方向とだけ考えられるものではありません。同時に自然史博物館の在り方、とくに展示のなされ方をも示しております。それは「地方主義」とでもよぶべき方向と、「第四紀学」の重視という方向であります。

#### 4. 地方主義

地方公立自然史博物館というのは、まず特定の地方に存在するのであり、その土地の自治体によ

って設立されております。これは、あたりまえの、わかり切ったことです。しかしその博物館では、その地元の物や現象をしらべたり集めたりすることがもっとも効率的で、遠隔の地の誰がやるよりも優秀な研究と充実した資料収集ができる、という簡単な原理は 案外見逃されているものです。また、その土地の身近な具体例で説明する方が、観覧者の興味につよく訴え、理解をスムーズにさせる、という事実は無視されることが多いものです。さらに、土地の抱える問題ととり組む姿勢が、設立者である自治体のバックアップを得られる、という面は、卑俗な功利主義として受け取られがちです。

しかしながら、手近の具体的な自然から研究素材を発見し、それを展示内容としてとり組む姿勢は、卑むべきことではない筈で、むしろその方が自然であると思えます。自然史ナチュラル・ヒストリーという学問自体が、そのように身近な自然を理解し、利用し、克服するために自然発生した学問であるからです。これが自然史科学のもつローカルな性格であります。

それと同時に、研究が進めば、対象の枠を拡げる必要が生じます。大阪という狭い地域のもつ特殊性は、日本全体や地球全体という広い地域にみられる一般性によって眺めるとき、その性格をさらに明瞭に、深く理解することができます。また地方で得た結論なり、法則性なりは、他地での効用性を検証されてこそ、普遍性を獲得できるのです。これが科学のもつユニバーサルな性格であります。

このようにして、学芸員の研究も、博物の展示内容も、地方から出発して世界全体へとひろがり、さらに抽象から具象へ、普遍性から特殊性へと回帰する、といった循環をくりかえすごとに、より充実し深化すると思われます。

## 5. 自然史博物館と第四紀学

悠久な地質時代の最末期、わずか 200 万年ほどの期間は第四紀とよばれています。この第四紀は現在につながるもっとも最近の時代であるだけに、そこにみられる事象は地質学的な法則性よりは生物学や化学等の現代科学の法則性によって支配されており、その研究も地質学的方法でよりは生物学や社会学の方法が適している面が多といわれております。また、地質・地形・古生物・古気候・人類等多面的な現象の錯雑体であるので、総合的な広い見地から調べられねばならないともいわれております。そのためか、従来どの分野の研究からも敬遠され、学問的に空白の多い未開拓領域・境界領域となっております。

一方この第四紀という時代は、人類がはじめて活動しはじめた時代であり、諸事象が人間との関連において理解されねばならない時代であります。

自然史科学というものが、人間の自然理解の努力から出発したことを考えると、第四紀学こそ自然史博物館の取り組むべき中心課題である——このように私は考えるようになりました。

第四紀の研究素材は、身近にいくらでもころがっております。そしてどの問題をとりあげても、我も人も含め、人間の興味をつよく惹きつける魅力をもっております。さらに、既製の大抵の種類の研究テーマと関連づけることができます。したがって自然史博物館における研究と展示の矛盾、博物館の質の向上は、この学問を中心に据えることで解決されるもの、と私は考えております。具体的な解決の道は個人個人で探さねばならないけれども。

# 1. 沿革

昭和24年11月8日：一自然科学博物館開設準備委員会設置  
 昭和25年4月1日：一自然科学博物館費予算に計上  
 昭和25年11月10日：一市立美術館2階廊下1部に展示開始  
 昭和27年4月17日：一博物館相当施設に指定

昭和27年6月2日：一大阪市立自然科学博物館条例および規則制定  
 昭和27年7月10日：一博物館法第10条により登録第2号  
 昭和32年6月7日：一市立美術館より現在地に移転  
 昭和33年1月13日：一開館  
 昭和39年3月31日：一市条例および規則改正現在に至る

# 2. 現況

## 2-1 所在地

大阪市西区靱2丁目52

## 2-2 施設

敷地面積：-2,376.0m<sup>2</sup>

延坪：-2,181.8m<sup>2</sup>

(内訳)

展示室 785.4m<sup>2</sup>  
 資料室 249.2m<sup>2</sup>  
 研究室 113.9m<sup>2</sup>  
 図書室 59.4m<sup>2</sup>  
 工作室 52.8m<sup>2</sup>

管理室 145.2m<sup>2</sup>  
 会議室 66.0m<sup>2</sup>  
 講堂 597.5m<sup>2</sup>  
 その他 775.9m<sup>2</sup>

## 2-3 開館時間・入館時間・休日

開館時間：一午前9時～午後5時

入場料：一無料

休日…一毎週月曜日・毎月末日・国民の祝祭日  
 未年始(12月28日～1月4日)

他に展示室の整備のため臨時休館することがある。

# 3. 職員および人事

(昭和43年3月1日現在)

## 3-1 職員の配置( )内人数

館長(1) ┌ 庶務係長(1) ─ 事務吏員(1)・事務員(1)  
 └ 学芸係長(1) ─ 用務員(2)・現業員(1)  
 ┌ 技術吏員(学芸員)(3)  
 └ 嘱託(1)

## 3-2 職員名簿

館長 千地万造 岸和田市並松町113  
 TEL 0724(2)1540  
 庶務係長 坂越謙治 大阪市東住吉区中加賀屋町2-90  
 TEL (685)5525

事務吏員 岡本益満(忠彦) 豊中市本町6丁目150  
 事務員 渡辺幸雄 神戸市東灘区魚崎町横屋379  
 学芸係長 日浦 勇 富田林市清水町17番327号  
 学芸員 柴田保彦 京都府相楽郡精華町祝園五反畑11-13  
 “ 瀬戸 剛 西宮市津門綾羽町5-28  
 “ 波田重熙 枚方市香里ヶ丘9丁目D34の302  
 TEL 0720 (54) 1692  
 嘱託 宮武頼夫 大阪市港区千代見町3丁目八雲住宅201号  
 用務員 内本光次 羽曳野市南恵我之荘1丁目2  
 “ 大谷春雄 大阪府南河内郡美原町円上  
 現業員 池田昭利 大阪市東区法円坂

## 3-3 職員の異動

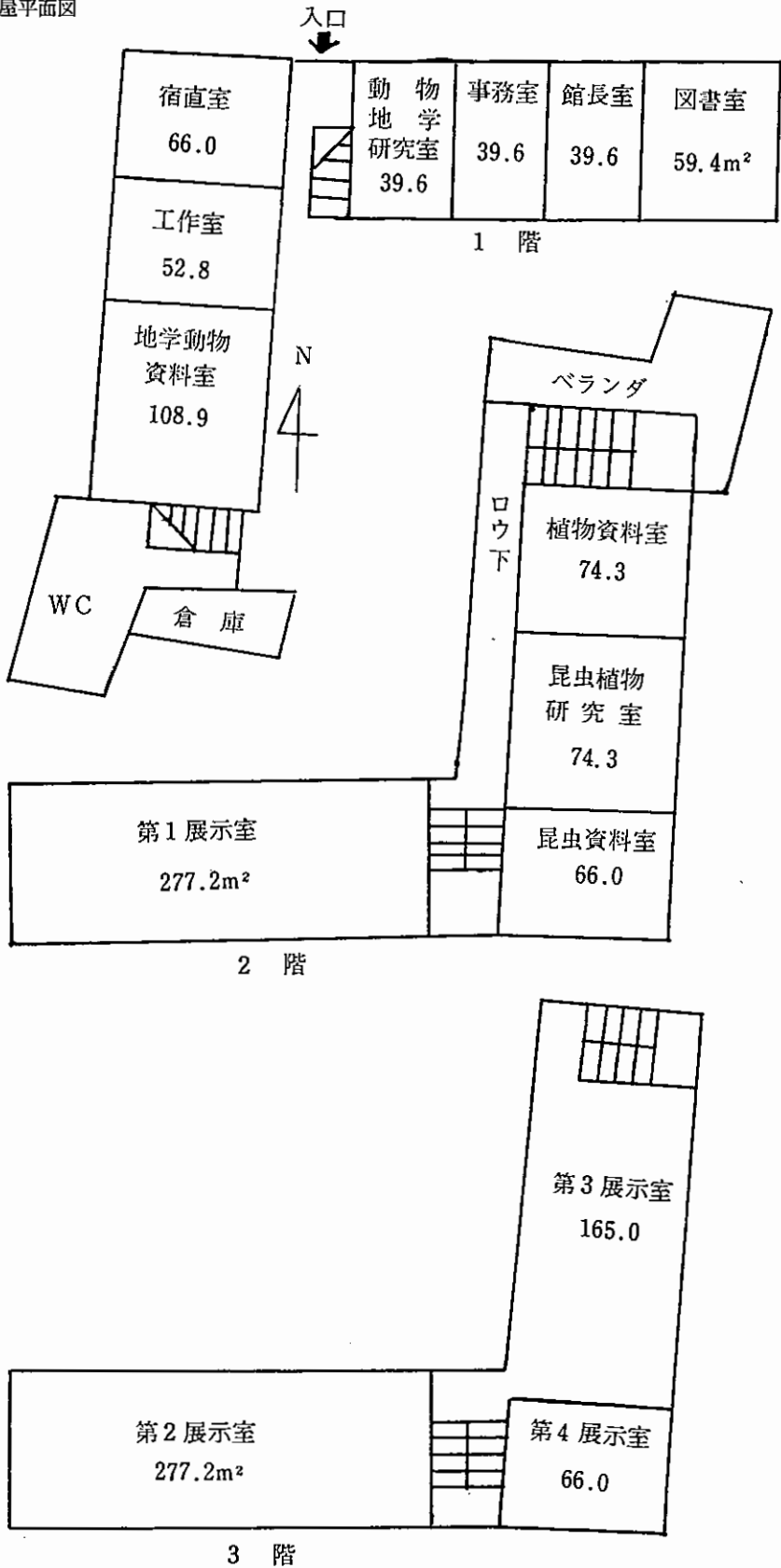
### 3-3-1 定数の推移

職 種	年 別							
	35	36	37	38	39	40	41	42
館 長	1	1	1	1	1	1	1	1
係 長	1	2	2	2	2	2	2	2
業職 務員	事務吏員	1	1	2	2	3	2	2
	事務員	2	2	1	1		1	1
学員 芸	技術吏員	4	3	3	3	4	3	2
	技術員	1	1	1	1		1	
用具 務	用務員				2	2	2	2
	現業員				1	1	1	1
嘱 託	2	2	2	0		1	1	1
合 計	12	12	12	13	13	12	13	12

### 3-3-2 異動(昭和39年4月1日一昭和43年2月1日)

昭和40年8月1日 筒井嘉隆 非常勤嘱託  
 昭和40年8月1日 千地万造 学芸係長より館長に就任  
 昭和40年8月1日 日浦 勇 学芸係長に就任  
 昭和40年8月28日 泉美代子 休職中死亡退職  
 昭和40年11月10日 森本英明 当館庶務係より市教委教職員課に転出  
 昭和40年11月10日 岡本益満(忠彦) 市教委指導課より当館庶務係に  
 昭和41年1月31日 辻本 修 願により退職  
 昭和41年4月1日 波田重熙 新規採用  
 昭和41年8月24日 渡辺幸雄 新規採用

館屋平面図





昭和42年3月30日 筒井嘉隆 願により退職  
 昭和42年5月1日 宮武頼夫 非常勤嘱託  
 昭和42年6月17日 山田紀正 市教委給与課福利係  
 へ転出

昭和42年6月17日 田原輝男 市教委庶務課より当  
 館へ  
 昭和43年1月3日 田原輝男 死亡退職

#### 4. 庶務報告

##### 4-1 入館者数集計

##### 4-1-1 昭和40年度入館者数集計

	団体	幼児 小学生	中学生	高校 大学生	一般	合計	備考
4	489	1,216	411	433	1,360	3,909	
5	1,079	1,047	400	294	1,049	3,869	
6	2,067	367	240	181	634	3,489	
7	843	649	215	151	616	2,474	
8	1,285	865	325	205	594	3,274	
9	206	859	339	154	655	2,213	
10	1,081	4,766	1,054	899	3,233	11,033	特別展
11	354	592	177	205	565	1,893	
12	480	304	137	130	355	1,406	
1	230	435	127	111	371	1,274	
2	573	491	165	104	516	1,849	
3	2,714	1,156	385	206	985	5,446	
合計	11,401	12,747	3,975	3,073	10,933	42,129	

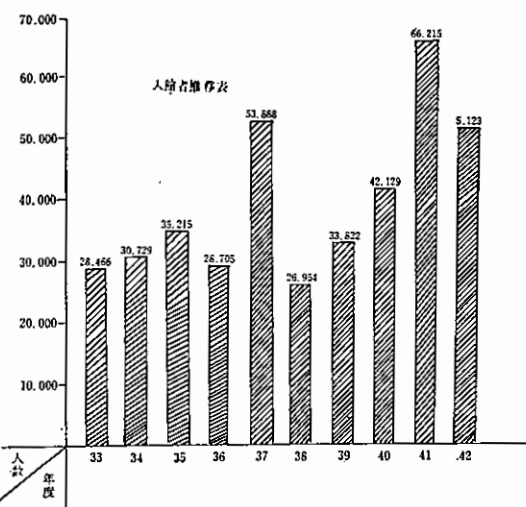
##### 4-1-2 昭和41年度入館者数集計

	団体	幼児 小学生	中学生	高校 大学生	一般	合計	備考
4	150	999	361	208	1,559	3,277	
5	1,539	640	175	178	1,159	3,691	
6	2,731	801	208	175	1,264	5,179	
7	731	742	253	179	946	2,851	
8	1,044	1,258	427	187	986	3,902	
9	505	784	235	139	757	2,420	
10	2,815	8,913	7,036	1,407	3,285	23,456	特別展
11	1,304	4,131	3,261	652	1,523	10,871	10/1~11/15
12	892	363	156	61	505	1,977	
1	233	380	84	52	415	1,164	
2	1,169	450	130	83	582	2,414	
3	2,704	963	244	114	988	5,013	
合計	15,817	20,424	12,570	3,435	13,969	66,215	

##### 4-1-3 昭和42年度入館者数集計

	団体	幼児 小学生	中学生	高校 大学生	一般	合計	備考
4	378	1,000	353	80	1,634	3,445	
5	904	988	264	128	1,700	3,984	
6	1,522	596	260	216	1,169	3,763	
7	757	625	278	166	953	2,779	
8	354	1,546	656	254	1,003	3,813	
9	762	1,184	266	182	937	3,331	
10	926	6,268	2,393	360	4,850	14,797	特別展
11	1,475	742	236	151	1,001	3,605	
12	1,032	442	150	96	428	2,148	
1	142	281	67	82	310	882	
2	2,712	455	86	112	512	3,877	
3	2,353	1,025	372	210	1,163	5,123	
合計	13,317	15,152	5,381	2,037	15,660	51,547	

##### 4-2 入館者数年度別推移



42年8月9日～15日、於阪神百貨店「世界の蝶展」、入場者85,521人

##### 4-3 昭和42年度実施工事

玄関ひさし改修工事 工費 310,000円

##### 4-4 昭和42年度予算

###### 歳入

博物館設備費補助金 50,000円

雑収(パンフレット売上代) 104,000円

合計 154,000円

###### 歳出(一部)

1. 展覧事業費 1,306,000円

2. 調査研究事業費 741,000円
  3. 普及指導事業費 292,000円
  4. 資料収集保管事業費 743,000円
  5. 一般維持管理費 745,000円
- 小計 3,827,000円  
 (2部)  
 自然科学博物館整備費 1,310,000円  
 合計 5,137,000円  
 但し人件費をのぞく

年度	39	40	41	42	(43)
歳出予算					
第1部	4,171	3,463	3,345	3,827	(4,160)
第2部	150	1,000	1,000	1,310	(1,500)
合計	4,321	4,463	4,345	5,137	(5,660)

## 5. 収集保管事業

### 5-1 当館の資料収集の方針

#### 5-1-1 地学部門

地学分野の収集資料には3つの異なる性格のものがある。a:教育用資料 b:研究用資料 c:文化財的資料 これらの資料が逐次たてられる展示計画に従って利用され、または研究に使用されることになる。

a) 教育用資料:一小学校~大学教養課程の教育に必要な基本的な化石・岩石・鉱物その他の標本を整備する。したがってこの中には外国産標本を購入することも多く含まれる。また一方郷土の自然についての知識を普及することが、学校教育・社会教育の両面において必要であるという観点から、大阪を中心とする近畿一円の地質誌的資料の収集につとめる。

b) 研究用資料:一学芸員および研究協力者の専攻分野における研究活動に結びついて収集することを原則とする。したがってこの資料については何らかの形で研究報告が公表されているかまたは公表が予定されていることになる。外部の専門家の研究のために本当に役立つ標本はこのようにして収集されたものであろう。この中には展示用として不向きなものが含まれても何ら支障ない。研究用資料の中には上記の他、学芸員が直接研究しないが、外部の研究者の研究用として収集するに足るものと判断して収集するものもある。

c) 文化財的資料:一研究者あるいは収集家が所蔵するコレクションで、自然史科学の分野においてその散逸を防ぐ必要があると思われるものについては寄贈・寄託・購入等の方法によって館が入手し保管するよう努力する。またその他の学術上貴重な標本については実物あるいはその模型を収集する。

#### 5-1-2 動物学部門

収集の方針、基本的な方針については地学でのべられたものとまったく同様である。

##### a) 教育用資料(展示用資料)

・脊椎動物(哺乳類、鳥類、魚類)

生きたものは動物園水族館などで魅力的な展示が見られる。当館ではこれらを系統的に展示する目的で、哺乳類については骨格標本、鳥類は本剥製を収

集の主眼とし、魚以下のグループについては将来模型などの形で展示するべく、剥製などの製作は保留している。

##### ○海産の動物

形態の多様性を示すため種々のグループの乾燥標本を展示用に製作した。液漬標本の展示は問題を将来に残している。

##### b) 研究用資料:

日本国内には自然史科学の分野での完備した博物館はまだない。しかし狭い動物群について云えば、収集の行きとどいたコレクションがいくつか知られている。新しい博物館が収集を始める場合、このようなグループをさけ、しかも館員の専門分野と一致したものを重点的に集めるのがもっとも合理的・経済的である。

一方、国内での地域性を考えると、例えば陸産のものについては近畿地方、海のもので考えると大阪湾・瀬戸内海などが中心となろう。

以上の2点を組み合わせ、汎日本的な研究用資料については日本産の両生爬虫類の収集を中心とし、哺乳類、鳥類の研究用資料は積極的に集めない方針である。また地域博物館としての役割を果たすため、海産動物は大阪湾・瀬戸内海、陸産淡水等の種々の動物群は大阪周辺のものを中心に考え、しだいに他の地域におよぶよう収集を行なった。ただし、採集法や標本製作の特殊なもの(例えば原生動物・プランクトンなど)は一切省略した。

このほか日本産の動物相やその成立を考える上で、特に重要な地域の総合的な収集も必要であり、さらに日本の動物相対比のため日本周辺地域の資料も必要である。しかしこれらについてはほとんど行えなかった。

##### c) 文化財的資料の収集

これには2つの意味がある。1つはあるグループのまとまったコレクションそのものが文化財的な意味をもつものであり、これの受け入れには博物館の対外的な信用(保管の完全性)がまず重要である。それに伴って資金と情報網が重要である。第2の

ものは近年の国土開発（自然の破壊・消滅）と関連するもので、消滅前の自然物の記録・保管である。イスラエルのキブツでは、キブツ内の小博物館でこのような資料収集が行なわれている例がある由である。正しい自然保護はこの事と一体であるが、日本ではまったく行なわれていない。当館動物部門でも、このことに無関心でありえないが残念ながら具体的な行動は行なっていない。

### 5-1-3 昆虫学部門

昆虫は種数がきわめて多いグループであること、体も大型のものから1mmに足らぬ微小なものまで、さまざま、その保存方法も多様であるので、これを平均的に集めることは当館の人員と予算から非能率的である。したがって当面の収集方針をつぎのような重点的なものにした。

- (1) 対象地域 外国産昆虫を副次的に考え、日本の昆虫に主力をおく。購入による収集はおもに外国産にあて、日本産は館員の採集を柱にする。国内では大阪産昆虫の完全なコレクションを第一目標とし、あとの日本産のものを平均的に集める。
- (2) 採集・標本製作保存方法からの制約 灯火採集、ベルレーゼ法（微小昆虫）等特殊な採集法でないとは採れないものは重点をおかない。またプレパラート・液漬等特殊な保管法をとらねばならぬものは重点をおかない。
- (3) 目別収集目標 比較的大型で、普通採集法で得られ、乾燥ピン刺標本にできるつぎの目を重点目標とした。したがってこれを一口に言えば「普通昆虫のコレクション」ということになる。

重点的に集める目	重点をおかぬ目
Odonata 蜻蛉目	Protura 原尾目
Dermaptera 革翅目	Collembola 粘管目
Orthoptera 直翅目	Thysanura 絨尾目
Gryllo- blattoidea コオロギ モドキ目	Epheme- roptera 蜉蝣目
Blattaria ゴキブリ目	
Phasmida ナナフシ目	
Mantodera カマキリ目	
Hemiptera 半翅目	Plecoptera 楮翅目
(Homoptera のアブラ ムシ類、カイガラムシ 類をのぞく)	Embioptera 紡脚目
	Isoptera 等翅目
	Psocoptera 嚙虫目
Mecoptera 長翅目	Mallophaga 食毛目
Neuroptera 脈翅目	Anoplura シラミ目
	Thysanoptera 総翅目
Lepidoptera -Rhopalocera 蝶類	Trichoptera 毛翅目
Diptera 双翅目	Lepidoptera -Heterocera 蛾類

Coleoptera 鞘翅目 Aphaniptera 隠翅目  
Hymenoptera 膜翅目 Strepsiptera 撚翅目

(4) 5カ年計画で日本産標本を約5万点集める。この目標がほぼ達成されたら、第2段階ではこれを同定・整理・公表する方向に努力し、また収集目標を変更することにする。

(5) この目標は予定より2年おくれて、昭和39年度にはば達成された。

従来の資料収集方針に加えて、昭和40年より化石昆虫の収集を手がけ始めた。これは現生昆虫の分布過程の研究と関連するものであるため、第四紀層のものを主目標にしている。第四紀学もしくは地学部門に含ましめるべきであろうが、便宜上昆虫学部門で記述する。

### 5-1-4 植物学部門

植物標本は普通おしほ標本（腊葉）の形をとるので、一般入館者への展示用としては有効でない。当館では植物関係の展示は将来実物標本による他の部門の展示があらまし完了した後、主として模型標本によって行なう構想をもっているため、現在展示用標本の収集は積極的には行なっていない。

研究用および教育用資料として、種子植物・シダ植物・コケ植物・海藻類・地衣類・高等菌類を対象とし、専門研究者・協力者のある前3者を主とし、他は機会のある場合に限り、収集する。地域的には日本産を主とし、自然環境が急速に破壊されつつある近畿地方とくに大阪の郷土資料の収集に努力する。

## 5-2 現有資料数

### 5-2-1 地学部門

化石標本	3,600点
岩石標本	1,000点
鉱物標本	1,350点
微化石標本	12,000点

### 5-2-2 動物学部門

（メラネシア調査のものおよび吉良コレクションの具を含まず）

哺乳類・鳥類	約 380点
両生・爬虫類	約 3,200点
魚類	約 2,000点
貝類	約 7,200点
甲殻類	約 1,600点
その他海産動物	約 1,100点

### 5-2-3 昆虫学部門

戸棚数 大型標本箱用22サオ、その他4サオ

大型標本箱数 1,040箱

標本数総計 95,772点（日本産82,057、外国産13,715）

標本登録状況 11,758件（日本産8,715、外国産3,043）

内訳	日本産昆虫	昭和40年 3月まで	昭和40年4月から 昭和43年3月まで
Orthoptera	直翅目	1,536	30
Grylloblattoidea			
	コオロギモドキ目	4	0
Blattaria	ゴキブリ目	66	2
Phasmida	ナナフシ目	45	0
Mantodea	カマキリ目	61	0
Dermaptera	革翅目	104	4
Psocoptera	チャタテムシ目	54	0
Isoptera	等翅目	5	0
Odonata	トンボ目	1,350	397
Heteroptera	異翅目	13,420	162
Homoptera	同翅目	2,292	265
Neuroptera	脈翅目	53	3
Mecoptera	長翅目	281	0
Lepidoptera- Rhopalocera	蝶	6,560	4,244
			378
			一般 吉阪コレク ション 3,866
Lepidoptera- Heterocera	蛾	1,443	71
Coleoptera	鞘翅目	20,295	1,474
Hymenoptera	膜翅目	2,684	48
Diptera	双翅目	2,160	30
水生昆虫 (積翅目, 毛 翅目など)		183	100
その他一般昆虫 (各目)			6,232
計		52,596	13,062
		計	65,658
外国産昆虫		昭和40年 3月まで	昭和40年4月から 昭和43年3月まで
蝶 (吉阪コレクション を含む)		11,461	436
蛾		473	0
甲虫		364	0
その他		24	17
粉川氏台湾産昆虫コレクション			200
南太平洋学術調査収集品		4,700	0
田中竜三氏コレクション (日本産をふくむ)		12,439	0
計		29,461	653
			計 30,114
総計		95,772	

### 5-2-4 植物部門

種子・シダ植物おしぼり標本	37,100
セン類標本	2,000
タイ類標本	7,000
海藻標本	300
菌類標本	100
地衣類標本	200

### 5-3 特筆すべき資料

#### 5-3-1 地学部門

(岩石) ○兵庫県玄武洞の玄武岩

○紀州・四国産御荷銚緑色岩類

(鉱物) ○ブラジル産メノウ

(化石)

○マチカネワニ全身骨格複製

大阪大学・京都大学・大阪市立大学と共同で豊中市柴原大阪大学構内において発掘されたマチカネワニ (Tomistoma machikanense KAMEI & MATSUMOTO) は、大阪大学理学部に収められたが、大阪大学では、これの複製模型を作成した。当館ではその原型を大阪大学より借用し、京都科学標本株式会社にて複製標本を作製、組立てた。それは、合成樹脂を材料としたものであるが、非常に精密で、色彩も実物と変わらず、複製である事が簡単にはわからない。実物に較べ軽量で、移動や組立も容易であり、すばらしい複元模型といえる。

○日本海島根沖海底産ナウマン象牙模型

昭和41年1月26日、島根県温泉津北方沖60kmの水深220mの海底から、正柴丸43t (鳥取県岩美、船長若本松夫氏)の魚網にひっかかって採集されたもの。当館のものはその京都科学標本株式会社製作合成樹脂製精密模型である。これは、約2万年前まで日本が朝鮮海峡を通じて大陸と陸つづきであったことを証明する貴重な標本である。長さ2m30 最大円周43cm

○岐阜県美山洞窟群産哺乳動物化石

○大阪市地下産クジラ化石

○東南アジア産中・古生代化石

○タカツキワニ骨格

○北海道産中生代白亜紀アンモナイト

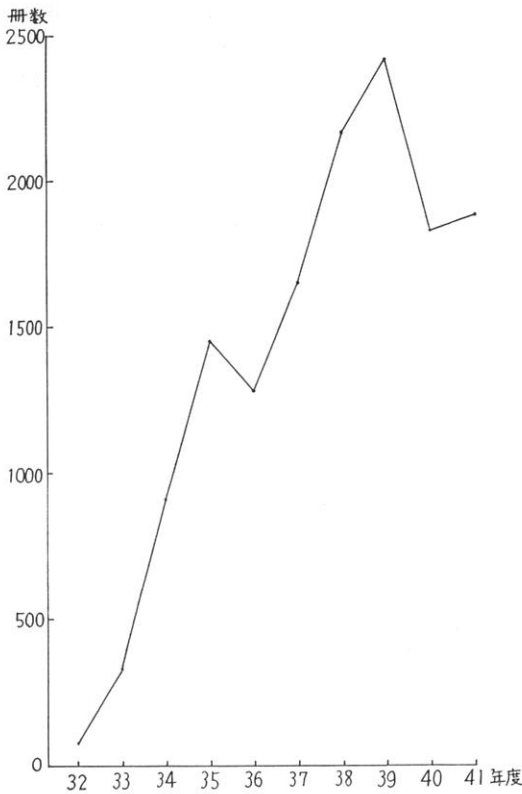
世界的な白亜紀アンモナイト研究として、九州大学教授松本達郎氏が、1940年頃から九州大学紀要を中心に発表されている論文がある。株式会社地科学社は、その論文に記載されているのと同じ、産地番号で、化石を採集した。このまとまった標本を当館は購入し、一部41年度特別展化石展で一般に展覧した。化石による年代区分や進化をみる場合、重要な標本である。

○明石象化石

明石市西八木海岸産アカシゾウ化石97点 同一個体のものと考えられる。神戸市須磨区南町2丁目1の4 紀川崎彦氏寄贈。

受贈のいきさつ

紀川崎彦氏 (神戸市須磨区南町2丁目1の4) は小学生時代から化石に興味をもち、明石付近の海岸が有名な化石の産地であることを知って、常に海岸の崖から化石を発見しようと注意を怠らなかった。中学1年の1960年



受け入れ冊数は39年度まで順調に増加して来たが、39年度の2,415冊をピークとして、40年度以降は1,800冊台の横ばいとなり、5-4-2でのべるように42年度も同様の横ばい傾向を示している。これは39年度で国内の新規交換先がほぼ出揃い、従ってそれ以降は国内では継続交換が主体となり、さかのぼってバックナンバーの交換・寄贈を受けることが少なくなったことによるものである。

#### 5-4-2 昭和42年度の収集

昭和42年度（42年4月～43年3月）に交換・受贈により受け入れた雑誌類は1,836冊で、累計冊数は15,819冊である。

年 度	受け入れ冊数	冊 移 の 累 計
昭和 42 年度	1, 8 3 6	1 5, 8 1 9

受け入れ冊数は前年度にくらべて2.5%減少しているが、40年度とほぼ等しく、大局的には40年以降の横ばい状態となっている。

#### 5-4-3 当館研究報告の配布

研究業績の公表と情報交換のため、毎年1回当館発行の“大阪市立自然科学博物館研究報告”を国内・国外の博物館・大学・研究所・学会などの公的機関に配布し、それぞれから文献の寄贈を受けている。また大阪市立中

央図書館・大阪府立図書館・国立国会図書館へも送付して、一般に公開している。

配布先は国内250カ所、国外70カ国430カ所である。国内配布先は5-4-1でのべたようにほぼ固定したのでそのメイリングリストを下に掲げる。国外は目下交換先を開拓中であるが、人手不足のため、まだ安定をみないので、国別の配布先数を掲げるに止める。このうちアメリカ合衆国・イタリア・オランダ・スウェーデン・スペイン・中華民国(台湾)・デンマーク・ドイツ・ノールウェイ・フランス・ベルギーの12カ国は国立国会図書館国際課を経由、他の諸国へは直送によっている。

#### 国内研究報告配布先

##### 学会・協会

- 日本学会議事務局図書課  
東京都台東区上野公園
- 日本博物館協会  
東京都台東区上野公園 東京国立博物館内
- 日本動物園水族館協会  
東京都台東区上野動物園内
- 東京動物園協会  
東京都台東区上野公園内
- 動物分類学会  
東京都新宿区百人町4の400 資源科学研究所内
- 日本貝類学会  
東京都台東区上野公園 国立科学博物館内
- 日本蛾類学会  
東京都大田区入新井4-112
- 信州昆虫学会  
長野県上田市信州大学繊維学部昆虫学教室内
- 東亜蜘蛛学会  
大阪府茨木市安威230 追手門学院大学生物学研究室
- 日本鱗翅学会  
大阪市東区今橋3の18 緒方病院内
- 大阪国際サイエンスクラブ  
大阪市西区靱1丁目118 科学技術センター内
- 日本甲虫学会  
神戸市東灘区御影町天神山46 大倉正文方
- 兵庫県生物学会  
神戸市長田区寺池町 県立兵庫高校生物教室
- 博物館・動物園・植物園  
網走市郷土博物館  
北海道網走市桂町  
斉藤報恩会博物館  
仙台市大聖寺裏門通3
- 秩父自然科学博物館  
埼玉県秩父郡野上町長瀬
- 国立科学博物館図書室  
東京都台東区上野公園





紀川標本の一部

12月26日、ついに明石市大久保町西八木海岸の崖の青粘土層の中から20cmほど露出していたアカシゾウの牙の化石を発見した。

この日以来紀川君はほとんどすべての休日を費して、須磨の自宅から発掘現場にかよい続け、星陵高校を卒業するまで実に6年にわたって、少年の独力によってドライバー1本でこつこつと掘り続け、別表のようにほぼ1頭分と思われる各部の化石を発掘した。

紀川標本の発掘経過

年月日	採集物
1960. 12. 26	明石象の牙
1961. 6. 18	歯, 不明骨
7. 21	背骨, 不明の骨, 二本目の牙
8. 4	不明の骨
10. 9	肋骨, 不明の骨
1962. 1. 7	肋骨3本
1. 14	前足の骨の破片?, 肋骨
3. 11	肋骨
7. 22	肋骨, 背骨
8. 23	背骨, 肋骨
10. 7	肋骨, 足の指の骨, 脛骨, 不明の骨
10. 14	肋骨, 背骨, 指の骨
10. 21	東大人類学教室, 石本剛一という名刺を発掘の現場で見つける。
12. 10	不明の骨
12. 25	肋骨, 不明の骨
1963. 3. 21	背骨, 指の骨
1965. 6. 9	肋骨, 背骨, 指の骨

しかし発掘が進むにつれて穴は深く危険な状態となり、また発掘した標本を私物として不完全な保管のもとに置くことに疑問を感じるようになり、一人の力ではこの発掘を完全になし遂げることができないことに思い至った。1965年になって紀川君は著書を通じて信頼を寄せていた東京経済大学教授井尻正二博士に相談した。井尻

博士からは京都大学亀井節夫博士に相談するよう指示があり、一方井尻博士から連絡のあった亀井博士は大阪市立自然科学博物館に寄贈することをすすめられた。紀川君の希望とこれまでの経過を亀井博士から聞いた当館はよろこんでその厚意をうけ、1965年6月15日千地館長・日浦学芸係長・波田学芸員が、亀井博士、市原実博士(大阪市大)、石田志明博士(京大)および京大大学院学生、京都教育大学生と共に紀川君の案内で発掘現場を調査した。6月29日当館から千地・日浦・柴田・波田・山田が紀川君宅に出向き、標本を受取って館へ運搬した。

この標本をさらに完全なものにするため当館によってアカシゾウ発掘が行なわれることになったがこのことについては5-5-0, 6-3-2で報告する。

昭和41年10月化石展開催に際して、この貴重な標本の寄贈に対し、中馬大阪市長から感謝状が贈られた。

なおこの標本の受贈経過については Nature Study Vol. 12, No. 10. (1966) にくわしく報告されている。

### 5-3-2 動物学部門

日本産の海産貝類 (吉良哲明氏旧蔵の標本)

琵琶湖・淀川産の淡水魚

### 5-3-3 昆虫学部門

日本産蝶類コレクション (約1万点)

館員の10年間の採集品や協力者からの寄贈、ジャクレコレクションに加え、昭和42年度において小型のシジミチョウ科を主とする吉阪コレクションが購入できたので、北海道から八重山諸島にわたる全日本の蝶を種類に関するかぎりほぼ集め、各地の地理的変異の概勢をほぼ把握できるような標本を収集した。昭和43年度において、これの検討・登録を行ない、資料目録を刊行する予定である。

### 5-4 文献交換状況

#### 5-4-1 昭和41年度までの収集

昭和32年度(昭和33年1月)に文献交換を開始してから昭和41年度末までに、交換・受贈によって受け入れた雑誌類は13,983冊である。年度別の収集状況は次の表とグラフのとおりである。

	受け入れ冊数	冊数の累計
昭和 32 年度	77	77
昭和 33 年度	331	408
昭和 34 年度	908	1,316
昭和 35 年度	1,453	2,769
昭和 36 年度	1,278	4,047
昭和 37 年度	1,649	5,696
昭和 38 年度	2,158	7,854
昭和 39 年度	2,415	10,269
昭和 40 年度	1,831	12,100
昭和 41 年度	1,883	13,983

横須賀市博物館

神奈川県横須賀市久里浜6丁目14番1号

小田原市郷土文化館

神奈川県小田原市城内3の22

佐渡博物館

新潟県佐渡郡佐和田

長岡市立科学博物館

新潟県長岡市御山町慈久公園内

富士国立公園博物館

山梨県南都留郡河口湖町島原

大町山岳博物館

長野県大町市神楽町2667

江ノ島水族館研究室

神奈川県藤沢市片瀬

日本モンキーセンター

愛知県犬山市栗栖

鳥取県立科学博物館

鳥取市東町2

比和町立科学博物館

広島県比婆郡比和町

山口県立山口博物館

山口市麻島

秋吉台科学博物館

山口県美祿郡秋芳町

愛媛県立博物館

松山市(松山局区内)二番町

服部植物研究所

宮崎県日南市(鉢肥局区内)本町3888

神戸市立須磨水族館

神戸市須磨区若宮町

研究所

水産

水産庁北海道区水産研究所

北海道(余市局区内)余市町

道立中央水産試験場

北海道(余市局区内)余市町浜中町238

水産庁東北区水産研究所

宮城県塩釜市東塩釜

東海区水産研究所図書室

東京都中央区勝時5丁目5番1号

淡水区水産研究所図書室

東京都(日野局区内)日野市宮399

日本海区水産研究所図書室

新潟市西船見町浜浦

大阪府水産試験場

大阪府泉南郡岬町多奈川谷川

兵庫県水産試験所図書館

兵庫県明石市

水産庁南西海区水産研究所

広島市宇品町1328

水産庁南西海区水産研究所高知庁舎

高知市棧橋通り6-2

西海区水産研究所

長崎市国分町49

地学

地質調査所北海道支所

札幌市南1条西18丁目

北海道立地下資源調査所

札幌市中島公園

建設省国土地理院図書館

東京都目黒区下目黒5-37

海上保安庁水路部

東京都中央区京橋築地5丁目

東京都土木技術研究所

東京都港区南1丁目1番18号

地質調査所資料室

神奈川県川崎市久本町135

神奈川県温泉研究所

神奈川県小田原市十字3の698の1

その他の研究所

資源科学研究所図書室

東京都新宿区百人町

農林省農業技術研究所図書課

東京都北区西ヶ原町

農林省林業試験場資料室

東京都目黒区下目黒4丁目

林野庁指導部造林保護課

東京都目黒区下目黒4丁目 農林省林業試験場内

山陸鳥類研究所

東京都渋谷区南平台町49

農林省神戸植物防疫所大阪支所

大阪市港区南海岸通1-3

大学

北海道地方

北海道大学理学部 地質鉱物学教室

札幌市北8条西5丁目

北海道大学理学部 動物学教室

札幌市北10条西8丁目

北海道大学理学部付属 厚岸臨海実験所

北海道厚岸郡厚岸町

北海道大学農学部 中央図書館

札幌市北9条西9丁目

北海道大学農学部 昆虫学教室図書室

札幌市北9条西9丁目

北海道大学農学部 付属演習林研究部

札幌市北9条9丁目

- 北海道大学水産学部 図書館  
北海道函館市港町
- 北海道教育大学 付属図書館  
札幌市南23条2丁目
- 北海道教育大学旭川分校 付属図書館  
北海道旭川市北門町9丁目
- 北海道教育大学 生物教育尻岸内臨海実験所  
北海道亀田郡尻岸内村豊浦
- 帯広畜産大学 付属図書館  
北海道帯広市川西町字稲田
- 帯広畜産大学 付属環境畜産学研究室  
北海道河東郡上士幌町糠平
- 東北地方
- 弘前大学付属図書館 理学部分館  
弘前市文京町1
- 弘前大学付属図書館 農学部分館  
弘前市文京町3
- 岩手大学農学部 付属図書館  
盛岡市上田
- 岩手大学付属図書館 教育学部分館  
盛岡市上田
- 東北大学理学部 地質学, 古生物学教室  
仙台市片平町
- 東北大学理学部 岩石鉱物地球学教室  
仙台市片平町
- 東北大学理学部 生物学教室  
仙台市片平町
- 八甲田山植物実験所  
仙台市片平町 東北大学理学部生物学教室内
- 東北大学浅虫臨海実験所  
青森県東津軽郡野内村浅虫
- 東北大学農学部 図書室  
仙台市北6番丁
- 秋田大学付属図書館 [鉱山学部・鉱山地質学教室宛]  
秋田市学園町1番1号
- 秋田大学鉱山学部 地下資源開発研究所  
秋田市学園町1番1号
- 秋田大学付属図書館 [教育学部研究紀要交換]  
秋田市学園町1番1号
- 山形大学 付属図書館  
山形市小白川町1丁目4-12
- 山形大学付属図書館 農学部分館  
山形市小白川町
- 福島大学付属図書館 教育学部分館  
福島市炭田町
- 関東地方
- 茨城大学文理学部 地学教室  
茨城県水戸市渡里
- 茨城大学文理学部 生物学教室  
茨城県水戸市渡里
- 茨城大学付属図書館 農学部分館  
茨城県稲敷郡阿見町
- 群馬大学付属図書館 教育学部分館  
群馬県前橋市日吉町1丁目14番7号
- 宇都宮大学付属図書館 農学部分館  
宇都宮市峰町
- 宇都宮大学付属図書館 教育学部分館  
宇都宮市峰町350
- 埼玉大学付属図書館  
埼玉県浦和市常盤町9丁目30番64号
- 東京大学理学部 動物学教室図書館  
東京都文京区本郷7-3-1
- 東京大学理学部 植物学教室図書館  
東京都文京区本郷富士町
- 東京大学理学部 地質学教室  
東京都文京区本郷本郷富士町
- 東京大学理学部付属 三崎臨海実験所  
神奈川県三浦市三崎町小網
- 東京大学農学部図書館  
東京都文京区弥生町
- 東京大学農学部 付属演習林本部図書館  
東京都文京区向ヶ丘弥生町
- 東京大学教養学部 自然科学紀要編輯委  
東京都目黒区駒場町865
- 東京大学海洋研究所  
東京都中野区南台1丁目15-1
- 東京教育大学理学部 動物学教室  
東京都文京区大塚3-29-1
- 東京教育大学理学部 植物学教室  
東京都文京区大塚3-29-1
- 東京教育大学理学部 地質学・鉱物学教室  
東京都文京区大塚3-29-1
- 東京教育大学付属 菅平高原生物実験所  
長野県小県郡真田町
- 東京学芸大学付属図書館  
東京都小金井市貝井北町4丁目780
- お茶の水女子大学 理学部生物学教室  
東京都文京区大塚35
- 東京水産大学 付属図書館  
東京都港区芝海岸通
- 東京農工大学 付属図書館  
東京都府中市幸町3-5-8
- 東京都立大学理学部  
東京都世田谷区深沢町
- 東京医科歯科大学 医動物学教室  
東京都文京区湯島3丁目

東京農業大学図書館

東京都世田谷区桜丘1-1-1

早稲田大学 教育学部理学科地学教室

東京都新宿区戸塚町1-647

早稲田大学 生物学教室

東京都新宿区戸塚町1の647

立教大学博物館学講座

東京都豊島区西池袋3丁目 立教大学2号館

目白学園女子短期大学図書館

東京都新宿区中落合4-31-1

千葉大学付属図書館(文理学部分館)

千葉市弥生町1

千葉大学文理学部 銚子臨海研究所

千葉県銚子市犬若町11319

千葉大学付属図書館 園芸学部分館

千葉県松戸市戸定648

横浜国立大学付属図書館 教育学部分館

横浜市南区清水ヶ丘41

横浜市立大学理学部 生物学教室

横浜市金沢区

中部地方

新潟大学理学部 地質学鉱物学教室図書館

新潟市西大畑町5214

新潟大学付属図書館 理学部分館

新潟市西大畑町5214

新潟大学農学部 図書館

新潟市小金町106

新潟大学教育学部紀要編集委員会

新潟市旭町2番町 新潟大学教育学部内

新潟大学高田分校 地学教室

新潟県高田市

富山大学付属図書館 理学部分館

富山市五福3190

富山大学理学部 地学教室

富山市五福3190

金沢大学理学部 地質学教室

金沢市丸の内1

金沢大学理学部 能登臨海実験所

石川県珠洲郡内浦町小木

金沢大学付属図書館 教育学部分室

金沢市丸の内1番1号

金沢大学教養部 地学科(図書館)

金沢市丸の内1-1

福井大学教育学部 生物学教室図書館

福井市牧島町26

福井大学教育学部 地学教室図書館

福井市牧島町26

山梨大学教育学部 図書館

山梨県甲府市武田4丁目4-37

信州大学文理学部 地学教室

長野県松本市県町

信州大学付属図書館 県町分館

長野県松本市県町

信州大学教育学部 地学教室

長野市西長野

信州大学付属図書館 教育学部分館

長野市西長野

信州大学付属図書館 繊維学部分館

長野県上田市

信州大学付属図書館 農学部分館

長野県伊那局私書函1号

信州大学農学部 付属演習林

長野県伊那局私書函1号

静岡大学理学部

静岡市大岩町2丁目

静岡大学付属図書館

静岡市大岩町2丁目

静岡大学付属図書館 農学部分館

静岡県磐田市見付

東海大学海洋学部 折戸図書分室

静岡県清水市折戸1000

岐阜大学付属図書館 農学部分館

岐阜県各務原市那加門前町

岐阜大学教育学部 付属図書館

岐阜市長良

名古屋大学理学部 地球科学図書室

名古屋市千種区不老町

名古屋大学理学部付属 菅島臨海実験所

三重県鳥羽市菅島町

名古屋大学農学部 演習林本部

名古屋市千種区不老町

愛知教育大学付属図書館

愛知県岡崎市明大寺町西郷中38

名古屋市立大学 付属図書館

名古屋市瑞穂区田辺通3丁目1

近畿地方

三重大学付属図書館 農学部分館

三重県津市上浜町

三重県立大学水産学部

三重県津市大谷町11

滋賀大学教育学部図書館

大津市石山平津町197

京都大学理学部 地質学鉱物学教室

京都市左京区北白川追分町

京都大学理学部 動物学教室

京都市左京区北白川追分町

京都大学 瀬戸臨海実験所  
和歌山県北牟婁郡白浜町  
京都大学農学部 図書館  
京都市左京区北白川追分町  
京都大学農学部 演習林  
京都市左京区北白川追分町  
京都大学みさき臨海研究所  
大阪府泉南郡岬町 みさき自然水族館内  
京都大学教養部 生物学教室  
京都市左京区吉田二本松町  
京都教育大学 付属図書館  
京都市伏見区深草藤ノ森町1  
京都工芸繊維大学 付属図書館  
京都市上京区北野神社前  
京都府立大学農学部 図書館  
京都市左京区下鴨半木町  
京都府立大学付属図書館  
京都市左京区下鴨半木町  
奈良女子大学理学部 動物学教室  
奈良市北魚屋西町  
奈良教育大学付属図書館  
奈良市高畑町  
和歌山大学教育研究所  
和歌山市真砂町1の1  
大阪大学理学部 図書館  
豊中市北刀根山宇北谷  
大阪大学教養部 図書館  
豊中市待兼山町1の1  
大阪教育大学 付属図書館  
大阪市天王寺区南河堀町  
大阪教育大学天王寺分校 地質学教室  
大阪市天王寺区南河堀町  
大阪府立大学図書館  
堺市百舌鳥梅町4丁804  
大阪府立大学農学部 昆虫学教室  
堺市百舌鳥梅町4丁  
大阪府立大学理学部 地学教室図書館  
大阪府住吉区杉本町459  
大阪府立大学理学部 生物学教室図書館  
大阪府住吉区杉本町459  
大阪工業大学 一般教育科地学教室  
大阪府旭区大宮北之町1-158  
武庫川女子大学 図書館  
西宮市池開町137  
神戸大学付属図書館 理学部分館  
神戸市灘区六甲台町12  
神戸大学付属図書館 教育学部分館  
神戸市東灘区住吉町赤塚山

兵庫農科大学付属図書館  
兵庫県多紀郡篠山町  
兵庫農科大学 付属加古川農場  
兵庫県加古川市平岡町新在家  
中国地方  
岡山大学理学部 地学教室図書館  
岡山市津島  
岡山大学理学部 生物学教室  
岡山市津島  
岡山大学 玉野臨海実験所  
岡山県玉野市渋川2丁目3-3  
岡山大学農学部 図書館  
岡山市津島  
岡山大学付属図書館 教育学部分室  
岡山市津島  
岡山大学大原農業生物研究所 図書館  
岡山県倉敷市  
広島大学理学部 地質学・鉱物学教室  
広島市東千田町  
広島大学理学部 動物学教室  
広島市東千田町  
広島大学理学部植物学教室  
広島市東千田町  
広島大学理学部植物学教室 ヒコピア会  
広島市東千田町  
広島大学教育学部 図書館  
広島市東千田町  
広島大学 付属向島臨海実験所  
広島県尾道市外向島町干汐  
広島大学付属図書館 水畜産学部分館  
広島県福山市沖野上町  
鳥取大学付属図書館農学部分館  
鳥取市立川町  
鳥取大学農学部 付属演習林  
鳥取市吉方  
鳥取大学付属図書館教育学部分館  
鳥取市立川町  
鳥根大学付属図書館  
松江市西川津町  
県立島根農科大学 付属図書館  
松江市乃木福富町  
山口大学付属図書館 文理学部分館  
山口市後河原150の1  
山口大学付属図書館 農学部分館  
山口市大学平井字廻田752  
山口大学付属図書館 教育学部分館  
山口市  
山口大学教養部 山口大学付属図書館教養部分館



山口県山口市吉田  
農林省水産大学校 付属図書館  
下関市吉見  
宇部短期大学 付属水質研究所  
山口県宇部市藤山

#### 四国地方

徳島大学教育学部 地学教室  
徳島市常三島町  
徳島大学付属常三島分館  
徳島市常三島町1丁目  
香川大学付属図書館 農学部分館  
香川県木田郡三木町  
香川大学付属図書館 教育学部分館  
高松市幸町  
愛媛大学文理学部 地学研究室  
松山市文京町  
愛媛大学文理学部 生物学教室図書館  
松山市文京町  
愛媛大学付属図書館 農学部分館  
松山市椿味町  
愛媛大学農学部 昆虫学教室  
松山市椿味町  
愛媛大学農学部昆虫学教室 四国昆虫学会  
松山市椿味町  
高知大学付属図書館 農学部閲覧室  
高知県南国市物部  
高知大学文理学部 動物学教室  
高知市朝倉1000  
高知大学宇佐臨海実験所  
高知県土佐市宇佐町  
高知大学教育学部 図書館  
高知市朝倉1000  
高知女子大学  
高知市北与力町1

#### 九州地方

九州大学理学部 地質学教室  
福岡市箱崎  
九州大学理学部 生物学教室  
福岡市箱崎  
九州大学理学部付属 天草臨海実験所  
熊本県天草郡苓北町富岡  
九州大学農学部 中央図書館  
福岡市箱崎  
九州大学農学部 昆虫学教室  
福岡市箱崎  
九州大学教養部 生物学教室  
福岡市六本松4丁目  
九州大学 生産科学研究所

福岡市箱崎  
福岡教育大学 付属図書館  
福岡市塩原町  
久留米大学商学部 図書館  
久留米市御井町  
大分大学教育学部 教育研究所図書室  
大分市駄ノ原  
佐賀大学付属図書館農学部分室  
佐賀市本庄町  
長崎大学付属図書館 水産学部分館  
長崎市文教町1-14  
長崎大学教育学部図書館  
長崎市大橋町  
熊本大学理学部 地質学教室  
熊本市黒髪町  
熊本大学理学部 生物学教室  
熊本市黒髪町  
熊本大学付属図書館  
熊本市黒髪町  
熊本大学教養部図書館  
熊本市黒髪町  
宮崎大学付属図書館 農学部分館  
宮崎市船塚町  
宮崎大学付属図書館 教育学部分館  
宮崎市西丸山町130  
鹿児島大学理学部 図書館  
鹿児島市鴨池町201  
鹿児島大学農学部 図書館  
鹿児島市市上荒田町1946  
水産学部付属図書館  
鹿児島市鹿児島大学  
鹿児島大学付属図書館 教育学部分館  
鹿児島市鴨池町251  
鹿児島大学教養部 図書係  
鹿児島市鴨池町101

#### 沖 縄

琉球大学 農家政工学部図書館  
沖縄 那覇市  
琉球大学 文理学部図書館  
沖縄 那覇市

#### その他

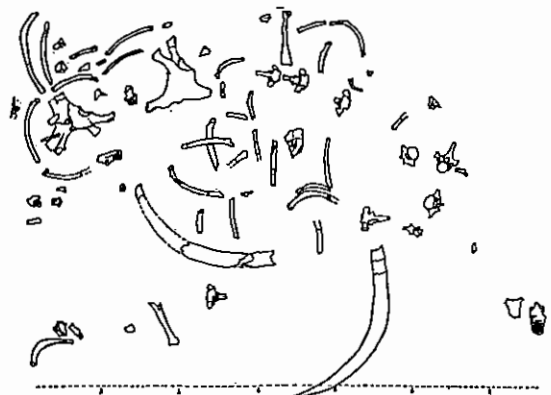
文部省社会教育局 社会教育課博物館施設担当官  
東京都千代田区霞関  
国立国会図書館  
東京都千代田区永田町1丁目10番1号  
大阪府立図書館  
大阪市北区北中ノ島1-29  
大阪市立中央図書館

- 大阪市西区北堀江御池通5  
 国外国別配布先数
- アイスランド Iceland  
 State Museum of Natural History 1カ所
- アイルランド Ireland  
 National Museum of Ireland など2カ所
- アメリカ合衆国 U. S. A.  
 American Museum of Natural History など76カ所
- アラブ連合  
 Société Entomologique d'Egypte など6カ所
- アルジェリア Algeria  
 Institut Océanographique d'Alger など2カ所
- アルゼンチン Argentina  
 Museo Argentino de Ciencias Naturales など6カ所
- イギリス England  
 British Museum (Natural History) など33カ所
- イスラエル Israel  
 Geological Survey of Israel など6カ所
- イタリア Italy  
 Museo Tridentino di Scienze Naturali など20カ所
- イラク Iraq  
 Natural History Museum. 1カ所
- イラン  
 Univ. Teheran 1カ所
- インド India  
 Indian Museum など6カ所
- インドネシア Indonesia  
 Museum Zoologicum Bogoriense など4カ所
- ウルグワイ Uruguay  
 Museo de Historia Natural 1カ所
- エクアドル Ecuador  
 Revista Ecuatoriana de Entomologia y Parasitologia 1カ所
- オーストラリア Australia  
 Australian Museum など28カ所
- オーストリア Austria  
 Naturhistorisches Museum zu Wien など9カ所
- オランダ Netherlands  
 Rijksmuseum van Natuurlijke Historie など13カ所
- カナダ Canada  
 Royal Ontario Museum など17カ所
- 韓国 Korea  
 釜山水産大学 1カ所
- ギリシヤ Greece  
 Institute of Geology and Subsurface Research
- 1カ所
- コスタリカ Costa Rica  
 Museo Nacional de Costa Rica 1カ所
- コロンビア Colombia  
 Instituto de Ciencias Naturales 1カ所
- コンゴ Congo  
 Inst. d'Etudes Centrafricaines 1カ所
- ジャマイカ Jamaica  
 Science Museum, Institute of Jamaica など2カ所
- シンガポール Singapore  
 Botanic Gardens, Singapore など2カ所
- スイス Swiss  
 Naturhistorisches Museum など8カ所
- スウェーデン Sweden  
 Naturhistoriska Riksmuseet など13カ所
- スペイン  
 Societat Española de Historia Natural, Museo Nacional de Historia Natureles など5カ所
- セイロン Ceylon  
 National Museum of Ceylon など2カ所
- セネガル Senegal  
 Inst. d'Afrique Noire 1カ所
- ソビエト U. S. S. R.  
 Institute of Scientific Information, Academy of Science of USSR など10カ所
- ソロモン British Solomon Islands  
 Department of Agriculture, Honiara 1カ所
- タイ Thailand  
 Forest Herbarium, Royal Forest Department など2カ所
- チェコスロバキア Czechoslovakia  
 Societas Zoologica Bohemoslovenica など10カ所
- 中国 中華人民共和国  
 中国科学院図書館 など9カ所
- 中国 中華民国(台湾)  
 台湾省立博物館など2カ所
- チュニジア Tunisia  
 Société des Sciences Naturelles de Tunisie 1カ所
- チリー Chile  
 Museo Nacional de Historia Natural など2カ所
- デンマーク Denmark  
 Universitets Zoologiske Museum など5カ所
- ドイツ 西ドイツ  
 Deutsches Museum など25カ所
- ドイツ 東ドイツ D. D. R.  
 Zoologisches Museum der Humboldt-Universität など11カ所
- トルコ Turkey

Department of Zoology, University of Istanbul  
 など2カ所  
 ニューカレドニア New Caledonia  
 Musée Neo-caledonien など3カ所  
 ニュージーランド New Zealand  
 Royal Society of New Zealand など9カ所  
 ノルウェー Norway  
 Universitets Zoologiske Museum, Oslo など5カ所  
 パキスタン Pakistan  
 Pakistan Association for the Advancement of  
 Science 1カ所  
 ハンガリア Hungary  
 Hungarian Museum of Natural History など4カ  
 所  
 フィリピン Philippines  
 University of Philippines など2カ所  
 フィンランド Finland  
 Societas pro fauna et flora Fennica など7カ所  
 ブラジル Brasil  
 Escola Federal de Minas de Ouro Preto など6カ  
 所  
 フランス France  
 Muséum National d'Histoire Naturelle など13カ  
 所  
 ブルガリア Bulgaria  
 Bibliothèque Centrale, Académie Bulgare des  
 Sciences 1カ所  
 ベトナム Vietnam  
 Institut Océanographique de l'Indochine 1カ所  
 ベネズエラ Venezuela  
 Museo de Ciencias Naturales など4カ所  
 ペール Peru  
 Museo de Historia Natural など1カ所  
 ベルギー Belgique  
 Musée Royal de l'Afrique Centrale など7カ所  
 ポーランド Poland  
 Ośrodek Dokumentacji i Informacji Naukowej,  
 Polskiej Akademii Nauk など8カ所  
 ポルトガル Portugal  
 Estação de Melhoramento de Plantas など5カ所  
 ホンコン 香港 Hong Kong  
 University of Hong Kong 1カ所  
 マダガスカル Malgache  
 Institut de Recherche Scientifique Tananarive  
 1カ所  
 マレーシア Malaysia  
 Sarawak Museum など3カ所  
 南アフリカ South Africa

South African Museum など7カ所  
 メキシコ Mexico  
 Instituto de Biología など3カ所  
 モナコ Monaco  
 Musée de Monaco 1カ所  
 モロッコ Maroc  
 Institut Scientifique Cherifien 1カ所  
 ユーゴスラビア Jugoslavia  
 Musei Macedonica Scientiarum Naturalium など  
 5カ所  
 ルーマニア Romania  
 Muséum d'Histoire Naturelle "Gr. Antipa" など  
 4カ所  
 レバノン Lebanon  
 American University of Beirut 1カ所  
 ロードシア Rhodesia  
 National Museum of Southern Rhodesia 1カ所  
 5-5 昭和40~42年度収集保管事業概要

5-5-0  
 ○アカシゾウ発掘経過  
 発掘までのいきさつ  
 昭和41年6月、紀川晴彦氏から同氏が独力で発掘した  
 アカシゾウほぼ一体分97点の化石の寄贈(5-3-1参照)  
 をうけた当館では、同氏をはじめ、このことに関係され  
 た多くの方々の当館に寄せられた厚意と信頼にこたえ、  
 この標本をさらに完全なものにして学問に貢献し、市民  
 に公開するため、紀川氏が掘り残した部分(ことに頭骨  
 ・下顎骨・大腿骨)を求めて明石市大久保町西八木の海蝕  
 崖の発掘が計画された。当時現場は近畿地方建設局姫路  
 工事事務所東播海岸出張所が前田建設工業株式会社の施  
 工によって護岸工事を行っており、その筋の了解と地  
 主の了解を得る必要があった。発掘は工事の中止される  
 盆の休日を利用して行なわれた。



アカシゾウ化石の埋まっていた状態(紀川晴彦氏提供)今回の発掘はさらに奥へ掘りこんだ。下の点線は最初の崖の面。

発掘の経過と結果

発掘は昭和41年8月13日から15日にわたって、京都大学亀井助教授、千地館長の指揮のもとに、別表名簿の通り延べ77人が参加して、紀川氏の発掘した範囲をさらに東西に4m、奥に約4m拡げて掘り進められたが、採集された化石は残念ながら少なく、ほぼ完全な脊椎骨1個と指骨(または趾骨)2個、肋骨の破片、肩甲骨の1部、不明の骨片数個が得られただけで、目標の頭骨・下顎骨・大腿骨などは遂に得られなかった。ゾウ化石のちらばりの方向はほぼ南北で、さらに掘り込めば残りの部分が発掘できたかも知れないが、最終の15日は午後から雨となり、崖の崩壊の危険が生じ、工事中の休日を利用したため、これ以上期日を延ばすことはできなかった。門歯

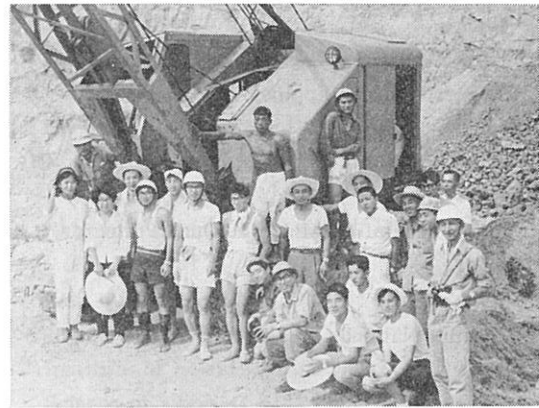
・上の臼歯などが、すでに紀川氏により採集されており、そのちらばりからみて、頭骨はこわれ去り、下顎はすでに海蝕によって失われた可能性が強い。

大西・野口両氏は花粉と珪藻の資料の採集、層序の決定を担当され、紀川標本受贈の頭初からお世話になった井尻博士はわざわざ東京から参加されて、種々助言下さった。前田建設の上別府・林田両氏はバックホーなど土木機械によって崖の上部の切取りを協力され、地元の桜井広一区長は種々の交渉や公民館八木会館の宿舍使用などに多大の便宜を計られた。

なおこの発掘の詳細は Nature Study Vol. 12, No. 10 (1961) に報告されている。

発掘参加者名簿

氏名	所属	8/13	14	15
井尻正二	東京経大		○	
井尻正子	北里大学生		○	
市原実	大阪市大		○	
岡本忠彦	大阪科博	○	○	○
大西郁夫	京大大学院	○	○	○
奥田隆延	勝山高生徒	○	○	
上別府満義	前田建設	○	○	○
亀井節夫	京大	○	○	○
紀川晴彦	星陵高卒	○	○	○
木村雅昭	吹田高生徒		○	
楠木幹浩	同志社高	○		
小西勇	堀川高	○	○	
柴田保彦	大阪科博	○	○	○
鈴木田鶴子	京大	○	○	○
瀬戸剛	大阪科博	○	○	○
橘敏明	早稲田大学生	○	○	○
千地万造	大阪科博	○	○	○
土江田佑三郎	京都・中京保健所員	○	○	○
中川要之助	京大大学院	○	○	○
中西昭弘	奈良教大学生	○	○	○
野口寧世	吹田高	○	○	
波田重熙	大阪科博	○	○	○
林田五郎	前田建設	○	○	○
別枝誓夫	京教大学生	○	○	
本田輝政	"	○	○	○
真野修	星陵高生徒	○	○	○
水田功	島根大学生	○	○	○
森蔭武義	吹田高生徒	○		
安松貞夫	京教大学生	○	○	○
吉田康子	"	○	○	○
S. ロペス	大阪科博	○		
和気秀子	京教大学生	○	○	
渡辺信生	吹田高生徒	○		



アカシゾウ発掘風景

5-5-1 地学部門

○購入資料

北海道アンモナイトなどの化石 763点

○館員の採集出張

昭和40年度

○福井県大聖寺(5月25~29日)(千地)

新第三系化石有孔虫試料収集

○岐阜県美山洞窟群(8月2~5日)(千地, 柴田) ナウマンゾウ下アゴなど約150点の第四紀動物化石採集

- 岡山県津山市（8月26～27日）（千地）  
本市 旭区 理科研究部会 化石採集 実地指導に行き、中新世の貝化石採集

昭和41年度

- 山陰地方（4月3～6日）（千地）  
堺市教育委員会地学野外研修会実地指導
- 兵庫県玄武洞（4月22～23日）（千地・波田）  
柱状節理の発達した玄武岩採集
- 岐阜県郡上郡八幡町熊石洞（8月8～11日）  
（日浦・波田）  
ヤベオオツノシカの角など約300点の第四紀動物化石採集
- 徳島県名西郡神山町（11月1～7日）（波田）  
御荷鉾緑色岩類などを採集
- 和歌山県有田郡金屋町・清水町（11月28～12月4日）（波田）  
御荷鉾緑色岩類、紡錘虫・アンモナイト化石採集

昭和42年度

- 総合研究「日本海域の地学的諸問題」の研究分担者として日本海において有孔虫採集（6月12～18日）（千地）
- 愛媛県東宇和郡野村町・宇和町（7月25～28日）（波田）  
秩父古生層の岩石・化石標本収集
- 長野県南佐久郡伊那谷地方（8月2～7日）（千地）
- 総合研究「大阪層群とその相当層に関する総合研究」の現地集會に参加化石収集
- 高知県長岡郡大豊村（8月19～26日、12月5～10日）（波田）  
総合研究「日本の変成帯形成史」の研究分担者として上記の地域を調査し、御荷鉾緑色岩類を採集
- 和歌山県白浜町（12月2～3日）（千地）  
化石有孔虫採集

以上のほか日帰りの採集および普及事業の際に採集を行なった。

○主な寄贈標本

1. 兵庫県明石市産アカシゾウ化石（file no 66-158）  
（神戸市須磨区南町2丁目1の4号 紀川晴彦氏）  
（詳細は5-3-1を参照されたい）
2. 大阪府高槻市産タカツキワニ化石（file no 66-161, 2）  
（布施市北蛇草259 山本勝吉氏）  
（茨木市竹橋町4の8 児島武利氏）
3. 黄銅鉱、方鉛鉱、輝緑凝灰岩 3点（file no 66

-167）

大阪市北区新川崎町1 三菱金属鉱業株式会社）

4. 岐阜県瑞浪市産貝化石 17点（file no 67-56）  
（岐阜県瑞浪市明世町月吉 早瀬光秋氏）
5. ブラジル産メノウなど鉱物標本 7点（file no 67-184）  
（大阪市都島区御幸町1の11 山添教一氏）
6. 中華民国台湾省産貝化石 51点（file no 67-188）  
（大阪市立大学理学部生物学教室 粉川昭平氏）
7. 大阪地下鉄4号線工事で出土した化石（file no 67-193）  
（大阪市交通局高速鉄道建設本部 出口守氏）

5-5-2 動物学部門

1. 購入標本
  - 1) 吉良哲明氏旧蔵海産貝類（42年度）
  - 2) フィリピン産陸産貝類
  - 3) 有明海産オオシヤミセンガイ
2. 館員の採集
  - 1) 対馬・壱岐産両生爬虫類（40年5月、41年5～6月）
  - 2) 岡山県吉井川水系の淡水魚など（42年3月）
3. 主な寄贈標本
  - 1) カンボジャ産ヘビ（依田恭二氏・40年6月）  
キングコブラなど
  - 2) 対馬・壱岐産淡水魚（友田淑郎氏・40年11月）
  - 3) インド産淡水魚など（杉山幸丸氏・40年12月）
  - 4) 八重山産両生爬虫類（下謝名松栄氏・41年1月）
  - 5) 壱岐産ヘビ（壱岐高校生物部・41年7月）
  - 6) 高知産オナガドリ（中江産業株式会社・41年7月）
  - 7) チーター頭骨（天王寺動物園・41年12月）
  - 8) 台湾産カエルなど（粉河昭平氏・42年4月）
  - 9) ワタリアホウドリ（極洋捕鯨山形幸久氏・42年4月）

5-5-3 昆虫学部門

日本産昆虫の平均的収集と大阪産昆虫の完全な収集という目標に加え、昭和41年度から第四紀化石昆虫を集めはじめた。それらの目的で担当学芸員（日浦）が行なった出張は次の通りである。便宜上調査研究のための出張及び普及行事の予備調査も含めて記述する。

- |             |         |          |
|-------------|---------|----------|
| 40年4月4日     | 京都深草    | 大阪層群昆虫化石 |
| 4月11日       | 豊中市待兼山  | 大阪層群昆虫化石 |
| 4月18日       | 京都深泥池   | 水棲昆虫     |
| 4月20日       | 高槻市水無瀬川 | 水棲昆虫     |
| 4月28日       | 金剛山     | 一般昆虫     |
| 5月11日       | 河内葛城山   | 一般昆虫     |
| 5月13日       | 大東市安田   | 沖積層昆虫化石  |
| 5月18・19・20日 | 橋本市     | 菖蒲谷層昆虫化石 |



6月6日	姫路市	一般昆虫	トンボ標本	7点	田端 修氏
6月23・24日	滋賀県長浜	水棲昆虫	カメムシ、トンボ等	3点	中村新次郎氏
6月30～7月7日	青森県下北半島	一般昆虫	近畿産オサムシ、カメムシ	6点	児玉 務氏
	田名部・恐山・尻屋崎・大間崎・佐井等で採集		サラワク産アリ	14点	芝田太一氏
	尚往路に東京都西ヶ原農業技術研究所昆虫分類		日本産甲虫同定標本(シテムシ科等)	531点	芝田太一氏
	同定室まで2,000点のゴミムシ科標本を持参し、				
	同定を依頼した。		枚方産昆虫標本	218点三角紙包24袋	岡田康稔氏
41年1月20日	大東市野崎	越冬昆虫	下北半島産昆虫	四角紙包27袋	佐藤 納氏
3月1日	三重県西青山	越冬昆虫	台湾産昆虫	141袋	粉川昭平氏
4月12日	和歌山県粉河町	一般昆虫	昭和42年度:		
4月20日	河内長野市三日月	水棲昆虫	大阪産カワトンボ	14点	畦 定子氏
5月18日	豊中市上新田	大阪層群化石昆虫	奄美群島産昆虫	65点	神吉正雄氏
5月24日	“ 待兼山	“ “	ヒメアカカツオブシムシ成・幼虫	80点	馬場耕一氏
5月29日	京都市	一般昆虫	神戸産ヨコヅナサシガメ	3点	殿界和男氏
42年1月8日	羽曳野市大和川	沖積層化石昆虫	奈良公園産糞虫同定済標本	58点	土井伸治郎氏
1月26日	桜井市初瀬山	越冬昆虫	蝶標本(キヤムラシジミ等)	8点	白水 隆氏
2月1日	“ 三輪山	“	琉球列島産セミ	3点	芝田太一氏
2月5～12日	三重県大台町・尾鷲市	越冬昆虫および水棲昆虫	日本産甲虫同定済標本(コガネムシ上科等)	191点	芝田太一氏
3月3日	泉南郡熊取町	大阪層群化石昆虫	北海道産蝶	11点	小野 決氏
4月30日	泉南郡東鳥取町	水棲昆虫	同翅亜目及び甲虫等	168点	鳥 洪氏
5月4日	橋本市紀見峠	“	双翅類等標本	36点	佐藤 納氏
6月7日	富田林市	“	奈良県河川産エゾスジグロチョウ	1点	牛島弘一氏
6月8日	能勢妙見山	一般昆虫	福井県白馬洞産テビシデムシ	1点	阪口嘉信氏
6月17～24日	北海道糠平	“	甲虫標本	2点	堀 勝氏
7月17～25日	北海道熊石村及び奥尻島	一般昆虫	奄美大島産蝶	45点	柴 政文氏
10月6日	茨木市宿久庄	大阪層群化石昆虫	オサムシ	7点	溝口 修氏
10月19日	富田林市	蝶幼虫	カメムシ等	83点	中村新次郎氏
43年2月4日	能勢妙見山	越冬昆虫	ハネビロトンボ	1点	東 輝弥氏
2月29日	和泉市僧太山	“	沖繩本島産トンボ	8点	井上 清氏
3月3日	“	“	沖繩本島産トンボ	11点	古山勝彦氏
3月24～26日	滋賀県	水棲昆虫	日本産蝶	3点	本田昌子氏
寄贈標本(受入順)			対島産大型昆虫	140点	大阪市立大学採集部 第5次ツシマヤマネコ調査隊
昭和40年度:			5-5-4 植物部門		
大阪近郊産トンボ	28点	尾花 茂氏	昭和40年度		
奄美大島産トンボ等	29点	井上 清氏	1. 40年度の方針、淀川びわ湖の生物展の開催に関連して水草の採集に力をいれる方針であったが、十分成果をあげることが出来なかった。		
タイリクアカネ	2点	宮崎俊行氏	2. 担当学芸員の資料収集に関する出張		
高知産トンボ	3点	岡本 啓氏	4月6日 兵庫県神崎郡大河内町砥の峯		
ヒメサナエ	2点	永瀬幸一氏	6月23日 滋賀県長浜市周辺		
昭和41年度:			6月30日 大阪府泉南郡砂川村近		
奈良市産水生半翅類等	17点	谷 幸三氏	7月6日 大阪府和泉市植尾山村近		
オオツヤマグソコガネ	2点	土井伸治郎氏	7月8日 三重県伊勢市島路山		
アラビア産セミ	3点	中島欣也氏	7月31～8月1日 滋賀県長浜市周辺		
沖繩産モンシロチョウ	7点	溝口 修氏	8月7～8日 兵庫県神崎郡大河内町砥の峯		
トンボ、蝶標本等	11点	尾花 茂氏			
奈良市水上池産トンボ	10点	関西トンボ談話会諸氏			
各地産トンボ	16点	畦 定子氏			
オオクワガタ	4点	岡田俊典氏			

2月4日 西宮市甲陽園付近  
2月16～19日 高知県佐川町周辺

3. 寄贈標本

鈴鹿山脈産植物標本	10点	児玉 務氏
滋賀県マキノ付近産植物標本	58点	〃
奈良県宇陀郡産植物標本	20点	〃
近県産植物標本	16点	〃
豊中市周辺産植物標本	5点	小山三郎氏
滋賀県日野町鎌掛産植物標本	12点	児玉 務氏
京都府産植物標本	14点	〃
奈良県生駒郡鳴川峠産植標本	5点	〃
兵庫県西脇市産エゾハリイ標本	1点	奥村英世氏
沖縄産植物標本	253点	仲曾根善守氏
屋久島産植物標本	31点	上田俊徳氏
沖縄・南九州産植物標本	27点	田川基二氏
三重県平倉演習林産植物標本	23点	児玉 務氏
計	475点	

昭和41年度

1. 担当学芸員の資料収集に関する出張

8月4～6月 兵庫県神崎郡大河内町砥の峯  
8月20～23日 三重県多気郡宮川村  
12月10日 大阪府大東市野崎付近  
12月14日 神戸市立魚崎中学校, 藤本義昭氏寄贈標本引取り

2. 寄贈標本

奄美大島産ヒメテンダなどシダ植物標本	3点	志村義雄氏
日本産シダ植物・海藻標本	65点	田川基二氏
〃 種子植物標本	90点	村田 源氏
〃 シダ植物標本	56点	倉田 悟氏
八丈島シマテンナンショウ標本	1点	山中雅也氏
和歌山県産ハヤマシダ標本	1点	真砂久哉氏
京都府産コケ植物標本	162点	竹内 敬氏
御殿場産シダ植物標本	3点	生田耕蔵氏
北海道産種子植物標本	4点	小山三郎氏
月ヶ瀬産ヒメカンアオイ	1点	谷 幸三氏
和歌山県産カンアオイ類	2点	生田耕蔵氏
和歌山県産アツミカンアオイ	1点	木下慶二氏
近県産植物標本	27点	桑島正二氏
大阪府産植物標本	29点	中西定雄氏
大阪府産植物標本	35点	桑島正二氏
屋久島産植物標本	2点	西本 裕氏
屋久島産植物標本	4点	小山三郎氏
大阪府産植物標本	6点	桑島正二氏
四国産ケキンモウワラビ標本	1点	市岡高校生物部
屋久島産植物標本	2点	松本邦夫氏
屋久島産シマサクラガンビ標本	1点	小山三郎氏
奈良県産植物標本	47点	児玉 務氏

福岡県産シダ植物標本	15点	筒井貞雄氏
大阪府産コガマ	1点	里中長治氏
大阪府・和歌山県産植物標本	50点	中西定雄氏
大阪府産ギンラン標本	1点	西川喜朝氏
長野県産オオバボダイジュ標本	1点	石川博規氏
京都府産など植物標本	5点	上田俊徳氏
大阪府産など植物標本	13点	桑島正二氏
大阪府産など植物標本	12点	中島徳一郎氏
兵庫県産など植物標本	40点	児玉 務氏
シダ植物標本	15点	田川基二氏
イネ科植物標本	30点	藤本義昭氏
大阪府産植物標本	3点	谷本充甫氏
和歌山県産など植物標本	50点	児玉 務氏
奈良県産ウキゴケ標本	1点	尾花 茂氏
奈良県産オオヒメワラビモドキ標本	1点	守田仁子氏
京都府産オオクボシダ標本	1点	田中義信氏
堺市産ホテイアオイ	3点	豊原 稔氏
各地産植物標本	100点	村田 源氏
九州産植物標本	27点	中西定雄氏
大阪府産植物標本	38点	中西定雄氏
北海道産植物標本	6点	真鍋鶴松氏
大分県産ホウライシダ標本	1点	山元 晃氏
和歌山県産植物	4点	堀 勝氏
大阪府産など植物標本	58点	中島徳一郎氏
大阪府産植物標本	9点	中西定雄氏
各地産植物標本	45点	村田 源氏
高野山産ヤマハンノキ	1点	山元 晃氏
各地産植物標本	170点	村田 源氏
シダ植物など植物標本	257点	倉田 悟氏
計	501点	

昭和42年度

1. 42年度の方針, 北海道出張を機会に日本北部産植物の標本充実を計る。

2. 担当学芸員の資料収集に関する出張

42年4月15日 神戸市六甲山  
5月27～29日 兵庫県養父郡関宮町鉢伏高原周辺  
6月17～24日 北海道釧平など  
8月6～14日 兵庫県養父郡関宮町鉢伏高原周辺

3. 寄贈標本

大阪府・和歌山県産植物標本	11点	中西定雄氏
大分県産ヤナギの一種	1点	山元 晃氏
奄美大島産シダ植物	4点	生田耕蔵氏
ツクリタケ・シイタケ標本	2点	上田俊徳氏
各地産植物標本	216点	田川基二氏
各地産植物標本	248点	田川基二氏
生駒山産植物標本	4点	西本 裕氏
各地産植物標本	120点	田川基二氏
九州産シダ植物標本	5点	生田耕蔵氏

柏原市マダケの花	1点	山本勝吉氏	豊中市産ウキアゼナ	1点	谷本充甫氏
高野山付近産植物標本	3点	山元 晃氏	コツブタケ標本	1点	上田俊穂氏
金剛山・大台ヶ原山植物標本	5点	西本 裕氏	四国産植物標本	32点	西本 裕氏
奈良県産植物標本	1点	小山三郎氏	北海道産植物標本	13点	真鍋鶴松氏
和歌山県産ミズギ標本	1点	中島国雄氏	大台ヶ原産地衣植物	3点	横井 定氏
和歌山県産植物標本	3点	山元 晃氏	奈良産など植物標本	4点	西本 裕・谷中英記氏
和歌山県護国山産植物標本	7点	堀 勝氏	奈良県産など植物標本	116点	児玉 務氏
滋賀県産など植物標本	107点	児玉 務氏	大阪府産など植物標本	12点	中西定雄氏
近県産植物標本	50点	上田俊穂氏	大阪府産など植物標本	22点	桑島正二氏
北海道産植物標本	102点	児玉 務氏	京都産など植物標本	39点	上田俊穂氏
金剛山産植物標本	8点	西本 裕氏	各地産植物標本	171点	布藤昌一氏
新潟県産など植物標本	117点	桑島正二氏	九州産シダ植物標本	37点	筒井貞雄氏
シダ植物標本	2点	芹沢俊介氏	北海道産コンプ標本	10点	佐々木茂氏
各地産植物標本	200点	水谷正美氏	計	1072点	

## 6. 調査研究事業

### 6-1 自然科学博物館におけ調査研究事業について

わが国の地方自然科学博物館の最大の弱点は調査研究であると思われる。そのことは現在地方博物館から出版されている研究報告がいかに少ないかということによっても明らかである。かつては大学において行なわれていた分類学や形態学などの記載的研究がすでに大学においては主流の座を実験的研究に空け渡している今日、自然科学の最も基礎的研究は標本の集積している、あるいはまた標本の収集・保管を仕事とする博物館においてなされなければならないのは当然である。事実永い歴史を持つ諸外国の博物館ではそれを行なっている。わが国では国立科学博物館がその役割を果たしているにすぎない。わが国の自然科学の発展を考えれば国立科学博物館のみでは余りにも貧弱である。少なくともこれと同等規模のものがあと2, 3館は必要であろう。

一方地方の博物館の大部分は歴史も浅いために資料の集積がなく、かつ人員・予算も小規模である、加えてこれら地方の博物館は社会教育機関であるという理由からか、調査・研究事業を余り重視しない傾向を持っているのではないだろうか、あるいはまたそのような理由から研究者がいないか、いても調査・研究活動が種々の条件によって制約されているのではないだろうか。しかしこれでは地方博物館は社会教育機関としての存在意義すら次第に失われてしまうのではないと思われる、なぜなら、本当の社会教育は学校教育の延長ではないし、自然史の調査・研究活動に支えられた、少なくとも、直接的つながりを持っていなくても、調査・研究活動を現に行なっている学芸員が立案・指導する展示・教育活動でなければ社会人にとって魅力あるものにはならないと信じるからである。

そのような意味で当館では調査・研究活動を重視している。この場合分類学だけが博物館の研究領域とは考え

ていない。もっと広い意味の自然史、それは分類学に基礎を置くものであるが、たとえば動物相、植物相の調査、生物分布とその成立過程、地史および地質誌、古生物群集の調査等々にも力を入れている。このような自然史的テーマをえらぶ方が調査・研究活動および収集・保管活動と社会教育活動の統一がとりやすく、地方博物館の活動として効果的であると思われる。

しかしながら、個々の学芸員には専攻分野の性格、学問的興味、研究能力その他種々の相違がある。したがって巻頭にのべた原則論をそのまま機械的に当てはめることはまちがっている。地域社会の人々と直接的には何のかわかりあひもない生物のごく1部のグループについての純粋に分類学的テーマあるいはその地域と何のかわかりあひもないようにみえる地域の自然史的テーマを持っている学芸員があるとすれば、その人は研究テーマを変更しなければならないとするのは皮相的な考え方である。その人はその研究をつづけて立派な成果を次々に出すべきである。だがそれだけで終るならば博物館学芸員としての社会教育面での責務は果たしていないことになる。それと同時に、彼はその研究活動を通じて高められた自己の研究者としての能力・自然への洞察力を社会教育面に注ぎ込むと共に、自己の研究成果を直接的に社会教育に使う機会を虎視眈々とねらう積極的姿勢をかまえるべきである。あるいはまた個人的なテーマはそれとして、社会教育面に直接役立つ調査・研究の機会がつくられればそれに参加する意欲を燃すべきであろう。このような意味で当館では学芸員個人のテーマと調査・研究活動はあくまで尊重し、さらにそのテーマを固定的なものとしてでなくテーマの発展と教育活動との結びつきの可能性をみつめてゆきたい(千地)。

### 6-2 研究体制

当館では地学・動物学・昆虫学・植物学の4部門に各

1名の専門学芸員が配置されているにすぎない。したがって館としての研究のレパートリーは狭く、研究活動のみならず、資料収集・教育活動面においても種々の支障があり、かつ市民の要望にも応えにくい。現在の段階では少なくとも各部門3名の学芸員と1~2名の学芸員補を必要としている。一方、外部との研究上での協体制も充分整備されていない。すなわち現在の当館の研究体制はきわめて貧弱であると言わねばならない。

われわれが日本博物館協会に地方博物館の研究体制の強化を強く要望し続けているのは、わが国の地方の自然科学博物館の実体が当館と大同小異であるという現実の上に立って、その研究機能を高めるためには、相互の提携を強めめることが先ず第一になされなければならないという考えかである。

以下が当館の研究スタッフと各人のこれまでの研究内容である。なお当館に対する外部専門家の協力については6-5に示した当館の研究業績によって知られたい。

千地万造 (CHIJI Manzo)

日浦 勇 (HIURA Isamu)

柴田保彦 (SHIBATA Yasuhiko)

瀬戸 剛 (Seto Ko)

以上館報 No.1 (1964) を参照

波田 重熙 (HADA Shigeki)

〔略歴〕

昭和39年3月：大阪市立大学理学部地学科卒

昭和41年3月：大阪市立大学大学院理学研究科修士課程（地史学・構造地質学専攻）修了

昭和41年4月：当館学芸員補

〔テーマ〕

A：西南日本外帯中・古生界の地史学的研究

西南日本外帯は大きくわけて仏像一糸川構造線を境にして①秩父累帯とその変成相でしめられる三波川帯と②年代未詳の地層よりなる四万十帯とに二分される。そのうち前者は、大きくみて4つの時代にわけられる日本列島地質構造発達史における第1・2の時代（中生代始め頃まで）の性格を明らかにする上に重要な資料を提供している。そこで紀州・四国における西南日本外帯中・古生界の詳細な地質図を作成し、その層序を確立し、この地域の地史的発展課程を明らかにしたい。その際特に地向斜（本州地向斜）における海底火山活動の産物とされる緑色岩類に注目し、その層序・地史学的研究を進めたい。

B：アンモナイト類の分類学的研究

アンモナイト研究は、生物進化の道程と地史という問題を明らかにする上で重要な役割を果している。よく研究の進んだ白亜紀アンモナイトにくらべ、トリアス紀（三疊紀）アンモナイト研究には、まだいろいろな問題が残されている。環太平洋地域にはトリアス紀アンモ

イトの産地が点在しているが、それらは非常に似た化石種構成を示している。そこで、最近発見されつつある東南アジアのトリアス紀アンモナイトを主に、その分類学的研究をおし進めたい。

〔研究業績〕

○ Discovery of Early Triassic Ammonoids from Gua Musang, Kelantan, Malaya (Notes on the Geology and Palaeontology of Malaya-III). Jour. Geosci., Osaka City Univ., vol. 9, art. 4-III, p. 111-122, pls. 3-4. 1966

○ On the Remarkable Unconformity at the Jengka Pass, Pahang, Malaya (Notes on the Geology of Malaya-IV). ditto. vol. 9, art.4-IV, p. 123-130. 1966 (市川浩一郎、石井健一と共著)

○ Discovery of Aptian Ammonites from the Shimanto Terrain, Western Shikoku. Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N. S., no. 62, p. 242-250, pls. 29-30, 1966 (中居功と共著)

○ Geology of the Middle-Aritagawa District, Wakayama Prefecture, with Special Reference to the Relationship between the Chichibu Belt and the Sambagawa Belt. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 20, 39-60, 2pls. 1967

宮武 頼夫 (MIYATAKE Yorio)

〔略歴〕

昭和35年3月：九州大学農学部農学科卒（昆虫学専攻）

昭和35年5月：ハワイ州ビジョップ博物館研究員（一年間）

昭和38年3月：九州大学大学院農学研究科修士課程修了

昭和41年3月：同 博士課程終了

昭和41年4月～昭和42年3月：学術振興会特別研究生（九州大学農学部昆虫学教室にて）

昭和42年5月：当館嘱託

〔研究テーマ〕

A 日本及び琉球列島産キジラミ科の分類学的並びに生態学的研究

キジラミ科はコナジラミ・アブラムシ・カイガラムシと近縁の半翅目の1グループで、大部分が樹木の害虫である。まだまだ研究が遅れているため各地から標本を集めて分類学的研究を進める一方、国内国外における分布や生活史等の生態的研究も重視している。やがては世界のキジラミ科の系統進化、もっと進んで同翅亜目全体の系統進化にまで発展させたいので、もっと広い地域の材料、もっと広範囲のグループへと拡げてゆきたい。

B 琉球列島の昆虫相とその解析

日本列島南部に分布する昆虫の中には、琉球列島を媒

体として大陸に共通種をもつもの、或いは東南アジア地域に共通の種(或いは近縁の種)をもつものがあり、琉球列島は動物地理学上、重要な位置をしめる。現在の琉球列島の昆虫相は当然一時代的に形成されたものではなく、地史とも深い関連があり、永い年月の間の隔離による種の分化、種自体の分布の拡散など重要な問題を数多く提供してくれるのでこれらの問題を解決してゆきたい。

C 近畿地方の同翅亜目昆虫の分類学的・地理学的研究  
このグループの近畿地方における分布・生活史等の研究はまだ完全でないので究明してゆく。

[研究業績]

A 日本及び琉球列島産キジラミ科の研究

- (1) キジラミ科若虫の生活習性の分化と形態との関係, 日本昆虫学会第19回大会講演
- (2) A revision of the subfamily Psyllinae from Japan (Hemiptera : Psyllidae) I, J. Fac. Agr. Kyushu Univ. 12 (4) : 323-357 (1963)
- (3) A revision of the subfamily Psyllinae from Japan (Hemiptera : Psyllidae) II, J. Fac. Agr. Kyushu Univ. 13 (1) : 1-37 (1964)
- (4) Psyllidae in the collection of the Osaka Museum of Natural History, with description of a new species (Hemiptera : Homoptera), Bull. Osaka Mus. Nat. Hist. 17 : 19-32 (1964)
- (5) On the Psyllidae from the Yaeyama Group, the Ryukyus (Hemiptera : Homoptera), Rep. Commit. For. Sci. Res. Kyushu Univ. No. 2 : 135-143 (1964)
- (6) Notes on Psyllidae from the Ryukyus (Hem. : Homo.), Kontyû 33 (1) : 171-189 (1965)
- (7) On some species of Psyllidae from the Hachijô Islands (Homoptera), Kontyû 34 (4) : 327-330 (1966)
- (8) *Pachypsylla japonica* sp. nov., a remarkable lerp-forming psyllid from Japan (Homo. : Psyllidae), Bull. Osaka Mus. Nat. Hist. 21 : 5-12 (1968)

B 琉球列島の昆虫相

- (9) 九州大学八重山群島調査隊の採集した同翅類, 九州大学海外学術調査委員会学術報告第1号, pp. 83-90 (1963) (宮本と共著)
- (10) 八重山群島調査隊の採集した蝸類, 九州大学海外学術調査委員会学術報告第2号, pp.117-120 (1964) (宮本と共著)
- (11) Aquatic beetles of Iriomote-iima collected by the member of the second Expedition of Kyushu University to the Yaeyama Group,

the Ryukyus. Rep. Commit. For. Sci. Res. Kyushu Univ, No. 2 : 135-143 (1964) (佐藤と共著)

C 近畿地方の同翅亜目昆虫の研究

- (12) 大阪付近のセミについて1, 2, Nature Study 14 (7) : 5-7, 14 (8) : 8-9 (1967)

D その他

- (13) Seasonal abundance and degree of parasitism of the Asiatic Rice Borer, *Chilo suppressalis* (Lepidoptera : Pyralidae) in Fukuoka Prefecture, Japan, Mushi 39 (3) : 31-46 (1966) (DeLoach と共著)

6-3 昭和40年以降の主要事業

6-3-1 岐阜県美山洞窟群調査経過

1. 昭和40年1月: 関西大学探検部学生が, 昭和39年11月同部が岐阜県郡上郡八幡町美山を中心とする石灰洞群で採集した動物の骨を当館に持参した。それらは, トラらしきものをはじめとして, ニホンジカ・アナグマ・ノウサギなどの豊富な動物化石であることが判明。
2. 昭和40年3月6日~9日: 関大探検部の第2回目の探検に同行して, 千地館長は, 美山の石灰洞群中, 規模のもっとも大きい熊石洞を予備調査した。その際再び多数の化石が採集され, 洞内外の状況もわかり, さらに野尻C洞の調査も可能なことが判明。予備調査参加メンバー: 千地万造(大阪市立自然科学物館), 古谷精宏, 永森洋一, 竹中俊晴, 佐保野博, 梅原孝史, 平元猛, 三戸忠弘, 渡辺彰仁, 高橋健夫, 三上正明(以上関西大学探検部)
3. 昭和40年8月2日~5日: 千地万造(自然科博), 亀井節夫(京都大学理学部), 柴田保彦(自然科博), 三戸忠弘, 岡崎収良, 夫婦岩勝人, 岩本琢磨, 水島淳(以上関大探検部)のメンバーで, 八幡町美山の井森月耕氏および大阪読売テレビから多くの協力をえて, 本格的調査を行なった。地表下18~20mに第1ホール(H1)とよぶ広間があり, その西端に巾約1.5mの裂け目が約35°の傾斜で南西方向に上っている。その裂か充填堆積物の層から, ナウマンゾウ・オオツノジカ・ニホンジカなどの下顎骨・肋骨・四趾骨その他多数の動物化石が採集された。さらに和良村宮代の野尻C洞からもニホンジカなどの動物化石がえられた。
4. 昭和41年8月8日~11日: 参加者: 日浦勇, 波田重熙(以上自然科博), 岡崎収良, 夫婦岩勝人, 岩本琢磨, 水島淳(以上関大探検部)谷幸三・前回の調査結果から, 今回は熊石洞のみを調査することになり, H1からのびる裂かを中心に採集を行なった。その際, F<sub>2</sub>の天井に大きな骨のギッシリつまった

新しい裂かみつけ、そこから多量の骨をえた。ナウマンゾウの臼歯、オオツノシカほとんど全身の骨、シカの各部、ノウサギ等、鑑定にたえる骨303個をえた。それらの一部は、41年度特別展“化石展”に展示したが、第四紀学会の招きで、日本を訪れていた東ドイツのカールケ博士がそれを見られ、ヘラシカの骨がまじっている事を指摘された。これは日本で初めての発見である。なお、この回の調査も地元の井森月耕氏、大阪読売テレビの協力を得た。また詳しい報告も近々なされる予定である。

### 6-3-2 アカシゾウ化石発掘調査

昭和41年8月13~15日兵庫県明石市大久保町八木の海蝕崖で、さきに紀川晴彦氏によって発掘、寄贈されたアカシゾウ化石の未発掘の部分の発掘復原、その層序の決定、ずい伴化石の採集、埋没状況の調査などを目的に行なわれた。(5-5-0参照)

### 6-3-3 タカツキワニ発掘調査

1966年7月17日、石友会(鉱物愛好者の集り)で当博物館とは密接なつながりがある。代表者真鍋鶴松氏)の例会が博物館会議室でひらかれた。これに出席するため来館した山本勝吉氏(東大阪市北蛇草259、電機店勤務)は大型脊椎動物の背骨など7点の同定を柴田学芸員に依頼した。この骨は7月10日高槻市北郊上ノロバス停脇の宅地造成地で拾ったものである。柴田の判断ではおそらくワニの骨であり、化石と考えられた。マチカネワニの先例もあるので、早速山本氏に案内をたのみ、千地館長の車で現地に急行した(千地・日浦・柴田・波田)。

現地は高槻市に向かって南へ緩く傾く面と原盆地側斜面との峠あたり、南斜面では厚い砂礫層の間に粘土層がはさまれた大阪層群が広く発達しており、宅地造成が大規模に進行中である。現場は採土が粘土層に当たったため中止された平坦面であり、造成面の水はけをよくするためにほぼ平行した2本のトレンチが掘られている。この北方原側のトレンチ(以後Aトレンチとよぶ)を掘った土がトレンチ南側に盛られており、この盛土表面で山本さんは問題の骨を拾ったものである。この日同地点からさらに骨片多数を発見し、歯1個の発見に成功したので、ワニ化石であることが確実となった。

同日、児島武利氏(茨木市竹橋町4-8新生荘、関西大学研究生)は関学探検会の大学生5・6名と共に付近の崖の粘土層よりカキヤ木材化石を発掘していたが、われわれの調査に興味をもち、協力を約束され、Aトレンチ南方のBトレンチの壁の発掘をはじめ、脊椎骨1個を学生が壁面粘土層で発掘に成功した。こうして問題の骨はワニ化石であり、大阪層群の粘土層中に包含されていたことが判明した。

7月23日 問題の粘土層の層準を判定するため、大阪府立大学市原実博士(大阪層群を専攻)にお願いして付

近を調査してもらい、現場付近に広範囲に露出している粘土層が第1海成粘土層(Ma 1)であることを確めた(同行千地・日浦)。

8月4日 現地の見取図作成のため、日浦・柴田が赴き、Aトレンチでさらに骨片数個を採集。

その後1967年に入って、日浦・柴田・波田により関連化石の採集がつけられ、また児島武利氏は余暇のほとんどを周辺地域の発掘にあてられ、収獲のすべてを館に寄贈され、研究を委ねられる等多大の協力をされた。また前田・千地・波田・日浦等によって包含層準の再検討も行なった。これらの結果、

①ワニ化石は、第1海成粘土層の上にくる砂礫層の基底部に小規模に散在する粘土薄層に含まれていたものであることが判明した。②また関連植物化石の同定を大阪府立大学粉川昭平博士・今井久両氏(古植物学)に依頼して次の結果をえた。

ワニ包含粘土薄層(Bトレンチ) クロマツ毬果少数・トウヒ属の鱗片と葉・コナンキンハゼ実多数・エゴノキ実・バラ属のトゲ

第1海成粘土層最上部(Aトレンチ付近) クロマツ・イヌガヤ・カヤノキ?・コナンキンハゼ

したがって当時の生息環境は現在の大阪とほぼ同様で、極端な寒暑は望めない。

③現在までに得られたワニ化石は、歯1個・脊椎骨20個・腸骨4個・肋骨の破片多数・四肢骨の破片などであり、少なくとも大小2体が混っており、大きい方の個体は推定体長3.5mものワニである。分類学的所属を判定するに足る頭骨が未発見であるが、マチカネワニの属するTomistomaか、又はそれに近縁のものであらうと思われる。日本からはマチカネワニに次ぐ第2のワニ化石であり、かつ産出時代がいちじるしく古いのが注目される。

尚、詳細は館の調査成果として別に発表予定である

## 6-4 昭和40~42年度の調査研究事業

### 6-4-1 地学

#### i) 昭和40年度

イ 美山動物群の発掘調査(別項6-3-1を参照のこと)

ロ 深層ボーリングによる大阪市の基盤地質の研究  
前年度より継続して行ない、研究結果は大阪府総合計画局より公表した(千地)。

大阪市地盤沈下調査(中間)報告書OD-1 調査報告 昭和39年3月 大阪府総合計画局

なお昭和40年4月日 日本地質学会第72年度会(於大阪科学技術センター)において報告した。

千地万造・池辺辰生・竹中準之介・市原優子・石田志明・宮崎浩・田井昭子・貝戸俊一・野口寧世  
: 深層試錘の結果からみた大阪市の基盤地質(第

ii) 昭和41年度

イ 美山動物群の発掘・調査 (別項6-3-1を参照のこと)

ロ 秩父帯と三波川帯の関係 (波田)

国際地球内部開発研究計画 (UMP) 地質構造部門のメンバーとして、徳島県名西郡神山町、和歌山県有田郡金屋町・清水町などで地質調査を行なった。この結果を Bulletin に公表し、また地質学会の総会・例会において発表した。これでは秩父帯 (非変成) と三波川帯 (変成) との関係について、層序、構造地質、岩石学の総合的な立場から検討を行なうと共に、その境界付近に分布する御荷鉢緑色岩類の意義、境界付近にみられる構造線の重要性について考察を行なった。

ハ 深層ボーリングによる大阪市の基盤地質の研究 (千地)

前年度より継続して行ない研究結果は次により公表した。

大阪市地盤沈下報告書OD-2 調査報告OD-1 調査追加報告、大阪市総合計画局1966・12・15

ニ 田辺湾底質中の有孔虫群集の分布について (千地、シルビオ・M・ロベス)

田辺湾における33地点の底層水温・pH・Cl<sup>-</sup>・O<sub>2</sub> 泥温の観測と底質中の有孔虫群集の調査を行ない、環境の変化による群集のちがいを明らかにし、内湾性第4紀層の堆積環境を推定するための基礎資料をえた。研究結果は日本地質学会第74年年会において公表した。近く京都大学理学部瀬戸臨海実験所研究報告によって出版の予定。

iii) 昭和42年度

イ 総合研究「日本海城の地学的諸問題」(千地)

本総研に分担者として千地が参加、日本海底質中の有孔虫群集の分布について研究を行なった。本研究には紺田功 (奈良県立奈良高校教諭) が協力者として参加した。

本年度は1965年水産庁所属明洋丸並びに1966年舞鶴海洋気象台所属清風丸の採集による日本海海底のドレッジ・サンプルおよびコアー・サンプル40地点分、および、本年6月東京大学海洋研淡青丸 (千地乗船) によって採集した奥尻島周辺の試料20地点分について、浮游性有孔虫並びに底棲有孔虫群集の水深による垂直分布の概査を行ない、その結果は昭和42年12月、本総研討論会において発表した。本研究は明年度 (43年) に継続する。

ロ 4th Congress, Committee of Mediterranean Neogene への参加 (千地)

1967年9月19日~30日イタリー・ボロニア大学で開かれた上記学会に池辺展生 (大阪市立大学) ・中世古幸次郎 (大阪大学) ・千地万造 (当館々長) は連名で下記論文を提出し、池辺教授が出席した。

Problems on the Terminal Miocene in Japan.

ハ 秩父帯と三波川帯の関係 (波田)

総合研究「日本の変成帯形成史」の研究分担者として高知県長岡郡大豊村の穴内川流域を中心に地質調査を行なった。三波川帯から秩父帯へと一連整合に続くこの地域の地質を層序、構造地質の面から検討を行なった。

ニ マラヤ産トリアス紀アンモナイトの研究 (波田)

大阪市立大学第4次東南アジア学術調査隊 (1964~1965) の隊員としてマラヤ東海岸を調査中、アンモナイト化石を多数採集した。それはトリアス紀前期 (mid-Schythian) の時代を指示しており、マラヤから始めての発見である。それについては、すでに大阪市立大学紀要 (1966) に報告したが、これをみられた Kummel 博士 (Museum of Comparative Zoology, Harvard University) から共同研究を申込みられたので、貴重な化石についての詳細な研究報告を共同発表するため、同第5次調査隊の野上裕生博士 (京都大学) が採集してくださったサンプルも含めて、化石のクリーニング、同定の作業を行い、Kummel 博士に送った。現在、7属8種を同定している。

6-4-2 動物学 (柴田)

i) 対馬産動物相の調査

主として両生爬虫類相を調べるため、昭和40年5月、41年5~6月に渡島し採集と調査を行なった。併せて、淡水魚その他陸上動物の採集を行ない、館の標本増加をはかった。結果の一部は当館研究報告で公表した (日本初記録のアムールカナヘビ、淡水魚の目録)。

また、大阪市立大学探検部のツシマヤマネコ調査に協力し、ヤマネコ糞中の食餌動物の鑑定を行ない、探検部報に結果を報じた。

ii) 古脊椎動物

岐阜県の洞窟調査や高槻で発見のワニ化石に関して、地学部門へ協力して化石の採集・整形・部位の鑑定を行なった。

iii) カンボジヤの両生類

大阪市立大学東南アジア調査隊採集の動物のうち、両生類を調べて当館研究報告で報じた。

6-4-3 昆虫学

i) ハナカメムシ科の分類 (日浦) ——ニューカレドニア産の1新種、日本及び近接地方の3新種・2未記録



種・1 既知種についての研究を行ない、Bulletin に3篇公表した。

ii) 水棲半翅類の分布(日浦)——日本列島における昆虫の地理的分布調査の一環として、過去10年間に収集した日本産の水棲・半水棲半翅類標本の検討を行ない、72種を Bulletin に2篇公表した。このうち従来日本から知られなかったものは4種ある。

iii) オサムシの分布(日浦)——近畿地方におけるオサムシ亜科の分布成立過程をしらべるために、冬期のミクロな分布調査を継続して行なっている。金剛生駒山地においてみられる系統発生上の位置と分布圏の様相との照応の法則性について Bulletin に公表した。さきに行なった分布成立時代についての推定を検証するため、室生火山区を中心にした調査をつづけているが、まとめるに至らない。

iv) トンボの分布(日浦)——人工による荒廃が現在ほどひどくなかった戦前の状態を知るために、宝塚昆虫館の所蔵標本を検討し Bulletin に公表した。現在の分布状況を把握するために、関西トンボ談話会の共同調査事業に参画して近畿地方トンボ基礎資料集の作製に着手し、43年3月に17種についてデータをまとめた。

v) 周日本海地域の昆虫分布とその成立過程の研究(日浦)——昭和42年度は金沢大学粕野義夫教授を代表者とする「日本海の地学的特性に関する総合研究」に研究分担者として参加し、奥尻島・道南熊石村を調査し、連絡誌「日本海」に「日本列島の動物相と日本海の問題」を投稿した。

vi) 新生代昆虫化石の研究(日浦)——主として大阪層群および沖積層の昆虫化石から、フォーナの変遷史および現在の地理的分布の成立過程を知ろうとする試みである。第1報として塩原化石湖からカメムシ2種を Bulletin に報告し、第2報「大阪の洪積・沖積層よりえたオサムシの化石」を日本昆虫学会42年度総会で発表した。

vii) チョウの分布(日浦)——日本列島蝶相の形成過程といった主題にそって、文献を漁り、野外調査・標本の比較形態学的調査を継続しているが、2、3の断片的な試論の公表にとどまっている。試論には次のようなものがある。

- ・異型アゲハの系統発生上の位置、昆虫と自然 1(3)
- ・モンシロチョウ属の歴史、昆虫と自然(投稿中)
- ・春季1化性蝶の生物地理学的特徴、Nature Study 13(4)

・カンアオイの分布 1・2, Nature Study 13(12), 14(3)

viii) その他(日浦学芸係長)——大阪市立大学探検部第3次ツシマヤマネコ調査隊のえたヤマネコ糞中の昆

虫の調査を依頼され、8種餌となることを明らかにした(「ツシマヤマネコ糞中の昆虫の同定」、市大探検、7号)。旧枚岡市の史編纂室より依頼されて昭和38年に調査した旧枚岡市域の昆虫のリスト(トンボ30種・直翅類36種・異翅類68種・同翅類18種・蝶71種・蛾76種)が東大阪市より出版された(生駒山を中心とする東大阪市の動物)。

ix) キジラミの分類と生活史の調査(宮武)——大阪を中心とする近畿地方の資料を収集、分類学的研究を行なう一方、分布・生活史を調査したが、珍しい習性を有する大阪産のキジラミを Bulletin に新種として記載発表し、生態的知見も付け加えた。国外の材料としては、メラネシア学術調査のニューカレドニアにおける採集品、デンマーク博物館から調査を依頼されているヌーナダン・エクスペディションの採集品、等があるが調査継続中である。

x) 大阪のセミの分布(宮武)——手はじめに既知の記録を文献から拾い出し、まとめを「Nature Study」の7月号・8月号に発表した。博物館所蔵の標本も分類し、脱皮殻の分類も試みた。

#### 6-4-4 植物学(瀬戸)

館報 I にあげた研究テーマ、A 近畿地方シダ植物の分類・地理学的研究(I、II報は当館研究報告16、17に発表)、B シダ植物園芸種の研究(未発表)を継続した。

#### 6-4-5 学芸員ゼミナール

博物館学芸員の専攻分野は自然科学の多岐にわたり、専門分野以外は知ることが少ない。学芸員が互いに理解しあうためと、巾広い知識を身につけるためと館員の研究ムードを高める意図をもって、昭和42年10月より毎週1回2時間程度のゼミナールを定期的にもつことにした。43年3月までのテーマを下記にかかげる。

- 10月25日 大阪の新生代層で発見されたオサムシ化石(日浦)
- 11月1日 同翅目におけるキジラミ科の系統上の位置と科内の習性の進化(宮武)
- 11月8日 シダの畸型の系統学的意義(瀬戸)
- 11月15日 有田川中流付近の地質を例にした地向斜と変成帯の問題(波田)
- 11月24日 対馬の淡水魚相の生物地理学的考察(柴田)
- 11月30日 田辺湾の底生有孔虫と Ammonia beccarii 群集の問題(干地)
- 12月6日 日本列島の昆虫相形成に対する日本海の意義(日浦)
- 12月13日 ゼンマイ科の系統についての遠藤誠道論文の紹介とシダの葉の Dimorphism(瀬戸)
- 12月21日 クレンツォフのカムチャッカの昆虫相、リンドロートのアリューシャン列島の生物相論文

の紹介(宮武)

2月28日 弧状列島について(波田)

3月6日 ワニの系統とヨウスコウワニの生態(柴田)

3月13日 前川博士の葉類説について(瀬戸)

#### 6-5 研究業績一覧

(Contributions from the Osaka Museum of Natural History) 業績番号 研究者“表題” 発表機関 巻号: 頁(発表年)

95. 池辺展生・石田志朗・千地万造“近畿における旧ゾウ化石の分布と層序” 化石, 9: 1~12 (1965)
96. 小島・千地・池辺・石田・亀井・中世古・松本“大阪層群よりワニ化石の発見” 第四紀研究, 4(2): 49~58 (1965)
97. IKEBE, N., CHIJI, M et ISHIDA, S. “Catalogue of the Late Cenozoic Proboscidea in the Kinki District, Japan” J. Geosci. Osaka City Univ., 9: 47~87 (1966)
98. SATO, M. “Some species of aquatic Coleoptera from New Caledonia” Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 19: 1~8, pl. 1 (1966)
99. HIURA, I. “A new species of Anthocoridae from New Caledonia” Ditto, 19: 9~11 (1966)
100. 柴田保彦“対馬のアムールカナヘビ(予報)” Ditto, 19: 13~17 (1966)
101. TSUNERI, K. “Notes on some Chrysididae and Sphecidae in the Collection of the Osaka Museum of Natural History, with descriptions of three new species (Hymenoptera)” Ditto, 16: 19~28 (1966)
102. HIURA, I. “Contribution to the Knowledge of Anthocoridae from Japan and its adjacent territories (Hemiptera Heteroptera) 3” Ditto, 19: 29~37 (1966)
103. 日浦 勇“栃木県塩原化石湖から発見されたカメムシの化石2種” Ditto, 19: 39~45, pl. 2 (1966)
104. 日浦勇“金剛生駒山脈における歩行虫数種の分布” Ditto, 19: 47~52 (1966)
105. 日浦 勇“宝塚昆虫館に所蔵されるトンボ標本” Ditto, 19: 53~58 (1966)
106. 児玉 務“近畿地方タイ類目録Ⅱ” Ditto, 19: 59~82 (1966)
107. 赤塚久兵衛“宝島(トカラ十島)の地形および地質” 大阪芸芸大学紀要B自然科学, 2: 143~149 (1953)
108. UMEZAKI, I. “Some Marine Cyanophyceae of the Tokara Islands” Botanical Mag. Tokyo, 68: (801) 63-70 (1955)
109. 蒲原稔治“トカラの魚” 高知大学学術報告, 4(8): 1~11 (1955)
110. KAMITA, T. “Some Shrimps and Prawns from New Caledonia” Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 20: 1~10, pl. 1 (1967)
111. (印刷中)
112. SHIBATA, Y. “A small collection of Amphibians from Cambodia collected by the Osaka City University Expedition 1962-65” Ditto, 20: 11~12 (1967)
113. KONDA, I. “Foraminiferal faunules from the Minabe-Sakai Shell Bed, Kii Peninsula, Central Japan” Ditto, 20: 31~38, pls. 2~4 (1967)
114. HADA, S. “Geology of the Middle-Aritagawa District, Wakayama Prefecture, with special reference to the relationship between the Chichibu belt and Sambagawa belt.” Ditto, 20: 39~60, pls. 5 & 6 (1967)
115. HIURA, I. “Contribution to the knowledge of Anthocoridae from Japan and its adjacent territories (Hemiptera-Heteroptera) 4” Ditto, 20: 61~63 (1967)
116. 日浦 勇“日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究 1. 大阪市立自然科学博物館所蔵標本の検討” Ditto, 20: 65~81 (1967)
117. 児玉務“近畿地方タイ類目録Ⅲ” Ditto, 20: 83~103 (1967)
118. 西村三郎“ケツギョ類の起源と分化” Ditto, 20: 13~30 (1967)
119. CHIJI, M. et LOPEZ, S.M. (1968) “Recent Foraminifera in the Tanabe Bay” Bull. Seto Marine Biol. Lab., (印刷中)
120. IKEBE, N., CHIJI, M. et NAKASEKO, K. “Problems on the Terminal Miocene in Japan” (印刷中)
121. MIYATAKE, M. “The Cleridae from New Caledonia” Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 21: 1~4 (1968)
122. MIYATAKE, Y. “*Pachyphylla japonica* sp. nov., a remarkable lerp-forming psyllid from Japan (Homoptera: Psyllidae)” Ditto, 21: 5~12 (1968)
123. 日浦 勇“日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究 II. 1967年北海道で採集した資料について” Ditto, 21: 13~17 (1968)
124. 柴田保彦“対馬産淡水魚目録” Ditto, 21: 19~29 (1968)
125. (印刷中)
126. 児玉務“近畿地方タイ類目録” Ditto, 21: 31~53 (1968)
127. 千地万造“大阪市深層ボーリング(OD-I)における大阪層群上部の化石有孔虫について” Ditto. 21: 55~61



第1展示室 前年度大きく変更を行なったので、今年度はそれを充実するべく、「化石とは何か」「化石を研究して何になるか」のブースを復活し、「偽化石・生痕の化石」「大阪層群」「変成岩」「堆積岩」の展示ケースを充実した。

第2展示室 秋の特別展後に、特別展で使用した「貝塚」のブースを入口に置き、それに関連する「盤長類の進化・ヒトの系統」のブースを第1展示室よりもってきて、「食用の貝の展示ケースと共に展示した。植物部門の展示は、5月に Naniwanosaurus で“海ソウのヒミツ”という標題で小・中学生に教材として、参観をよびかけたのを機に、「美しい海藻」「食べられ海藻」などの展示を行なった。また押花の展示も「カエデのなかま」など季節に応じて展示変えた。貝の展示コーナーは特別展後変更充実しつつある。

第4展示室 秋の特別展後、カミキリムシやコガネムシのなかまを主体に甲虫の展示を拡大充実したのを機会に、3月1日～4月30日まで、小特別展「日本の甲虫展」を開いている。

### 7-3 特別展

#### 7-3-1 びわ湖・淀川の生物展

趣旨：人類は自然界の一員として生まれ、自然の中で、自然をたくみに利用して今日の文明をきずいた。自然は多様であり、人間の自然利用もまたさまざまである。日本の政治・文化の中心であり続けた近畿という地域社会の発展の歴史は、近畿の自然への依存・利用・開発の歴史であったともいえる。その中央をつらぬく琵琶湖・淀川水系には豊かな動植物が生活しており、われわれの遠い祖先はそれを食べ、加工することで文明への一歩をふみ出した、以後の近江・京・大阪の人々は、ここの生物の利用法をいかに変えながら今日にいたっている。

この展覧会では、琵琶湖・淀川水系の生いたち、そこに棲む生物相の豊かさを紹介するとともに、こうした生物の利用の歴史に焦点をあて、自然が人間にとって如何に大切なものであったか、を市民に訴えたい。そしてびわ湖淀川の水と生物を、どう大切にしていこうかについて考えてもらいたい、という意図のもとに行なった。

期間：昭和40年10月1日(金)～20日(水)

場所：3階第3展示室（なお同時に第4展示室では「淡水魚の魚拓展」を併催した。これは関西魚拓の会および釣の友社の協力の下に、一般から公募した。）

出陳内容：テーマは平面図参照

A. 写真60点（漁16・風景8・養殖13・水草6・貝塚6・その他8）内六山正孝氏よりフィルム43枚の提供を受けた。

B. 魚液漬標本計67種 162点（本展覧会中展示にもっとも苦心したもので、板ガラスを貼り合せてガラスケース60個を作り、その中に塩化ビニール板を入れ、これに

魚体をテグス糸で縛りつけ沈め、ホルマリン液を入れ、上面より照明した）

- C. 魚加工品9点（阪神百貨点出品）
- D. 淡水真珠 3箱7種 梶山彦太郎氏出品
- E. 大阪層群の化石11種33点（うち2点のみ大阪大学地学教室出品）
- F. 石山貝塚出土品 9種
- G. 日下貝塚出土品 17種（うち9種は井上正治氏出品、7点は大阪市立博物館出品）
- H. 淡水貝 84箱 梶山彦太郎氏出品
- I. 魚の生品 13種を水槽9個に入れた。
- J. 水草の生品 23種
- K. 魚拓製作用具一式 遠井昇之進氏出品
- L. 淡水魚の版画 6点 釣の友社出品
- M. 魚拓（一般公募入選品）41点
- N. パネル 109点

パンフレット：「びわ湖・淀川水系の生物」12ページを刊行

入館者数：11,033名

評価：自然科学博物館のとりくむべきテーマをつよく前面にうちだし、その線に沿って収集した館蔵品を中心に展示を行なえた。もっとも秀れた展覧会であった。

#### 7-3-2 化石展

昭和41年10月1日より11月15日まで、当館2階第1展示室全室を使用して開催した。入場者数は、特別展としては最高の33,168名であり、なかでも10月9日（日）は3,234名で玄関で入場を制限した。

これには、化石そのもののもつ魅力・PRの徹底と共に、館が行なった多くの調査（マチカネワニ発掘・アカシゾウ発掘・岐阜県郡上八幡の洞窟調査などの結果を生々しく展示したことが大きく影響したと思われる。

内容は、次の11のテーマに従って展示し、観客自身が自分で考えながら楽しんで見られるよう展示方法に苦心をはらった。導入は大阪市民の足元にある大阪市の地層の成りたちからはじめ、最後に化石というものの定義やわれわれの生活とのつながりで話しを結んだ。①なにわのあけぼの（大阪地下の貝化知・貝塚）。②ウルム氷期（ナウマンゾウ・オオツノジカ・ヒョウなどの化石）。③海底にねむるゾウの墓場（大阪湾より発見のナウマンゾウの各部分の骨、上町台地、④ワニのすんでいた入江（マチカネワニ全身骨格の模型、大阪層）。⑤滅びゆくメタセコイア（メタセコイア植物群、高槻のワニ化石）。⑥アカシゾウ（全身骨格部分の骨）。⑦新生代の化石（デスモチルスや各種のゾウ化石など）。⑧中生代の化石（アンモナイトの進化・ニッポノザウルス）。⑨古生代の化石（リンボク・ロボク・フウインボク・三葉虫・筆石など）。⑩化石とは何だろう。⑪化石はどんな役にたっているか。

初めてのころみとして、記念スタンプを作成したが、小学生などにはたいそう好評であった。

大阪自然科学研究会では、会期中に発行の会誌 Nature Study を2カ月にわたって化石特集号とし、また特別展の案内書をも出版した。

### 7-3-3 貝の世界展 (第5回特別展)

昭和42年10月1日～31日、当館第3展示室東半分と第4展示室で開催、14,797名の入場者があった。この数字

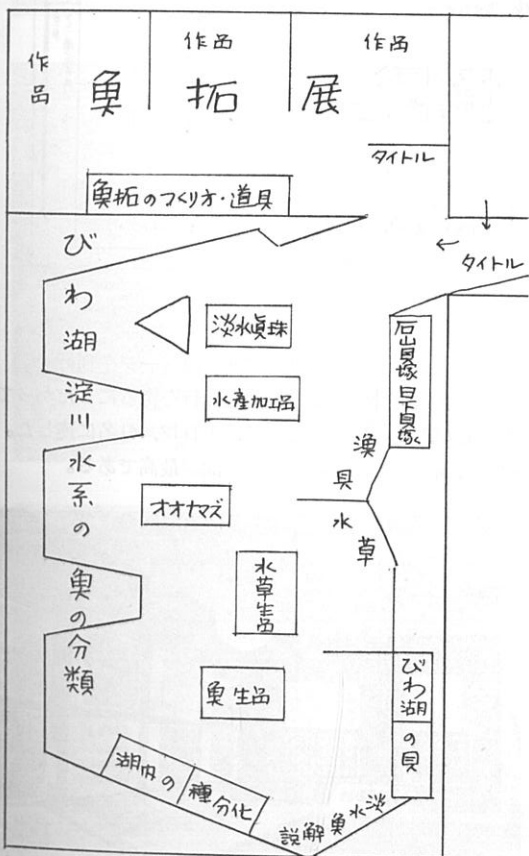
は前年度より少なくなったとはいえ、ほとんどが個人の参観者であり、一般の参観者が増えた点成功といえる。学生の団体が減ったのは資料の点から考えて仕方ないとみられる。昭和42年6月に購入した吉良コレクションの貝に、従来の館蔵標本、梶山彦太郎氏、小管良夫氏、波部忠重氏らの出品を加えた約15,000点の貝類標本を主体にし、関連軟体動物、貝化石、貝塚より出土した石器ケモノの骨、食用貝などを加えて展示した。



淀川・びわ湖の生物展 漁具コーナー



淀川・びわ湖の生物展・魚拓コーナー



特別展 淀川・びわ湖の生物展見取図

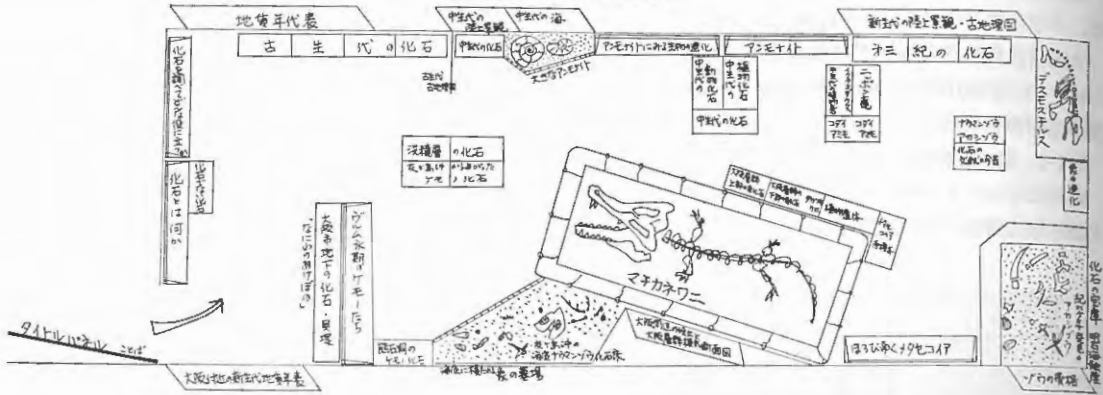


淀川・びわ湖の生物展・加工品のコーナー

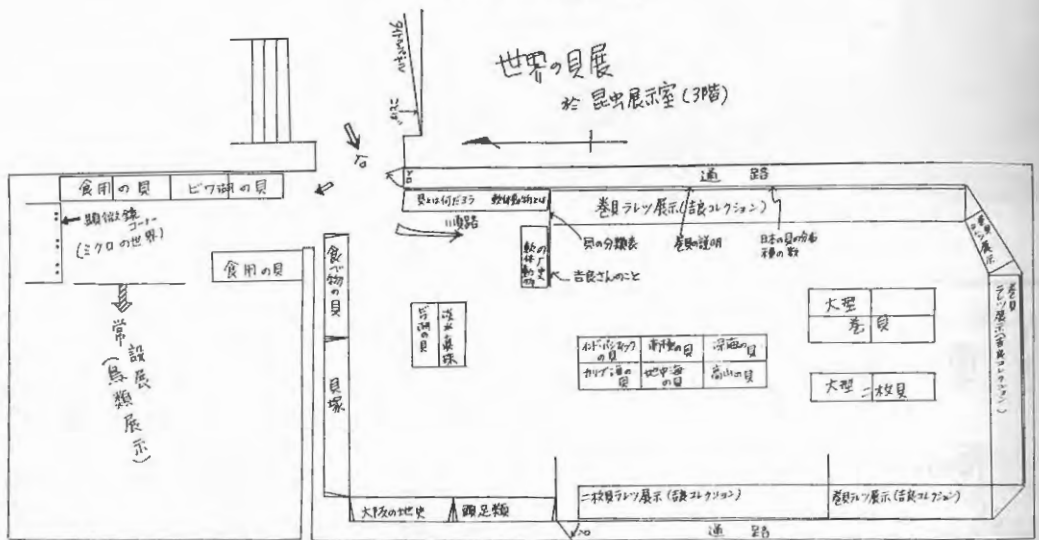


淀川・びわ湖の生物展・魚のコーナー

昭和41年特別展「化石展」見取図



昭和42年特別展「世界の貝」見取図



内容は、軟体動物の概念・歴史をイントロダクションとし、吉良コレクションの分類展示と、大型種・華麗種・南極の貝・深海の貝などめずらしい貝を展示した。さらに、貝化石にみる大阪の地史・貝塚・食用貝・ピワコの貝・淡水真珠の展示をした。また、微小な貝を日本光学株式会社から借りたビノキュラでみせて、子供に好評を得た。パンフレット：「貝の世界」16ページを刊行

### 7-3-4 世界の蝶展

読売新聞社の要請によって、ジャクレーコレクションを中心とする当館所蔵の内外蝶類標本を貸出し、特別展覧を行なったものである。展示計画の立案、標本のアレンジはすべて館で行ない、実質的に当館の特別展であった。

場所：大阪梅田 阪神百貨店 8階催物

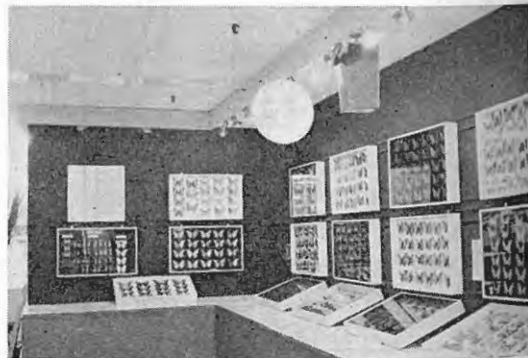
日時：昭和42年8月9日(水)～15日(火)

主催：大阪読売新聞社

出陳内容：標本 8,800点、生態写真64点(テーマは図

参照)

パンフレット：「世界の蝶展」24ページを刊行  
 入場者数：計85,521名(開場後日を得るにしたがって入場者がふえ、14日(月)には1日18,441名に達した。単位時間当りでは2時～4時の間が最高である。



世界の蝶展(阪神百貨店)





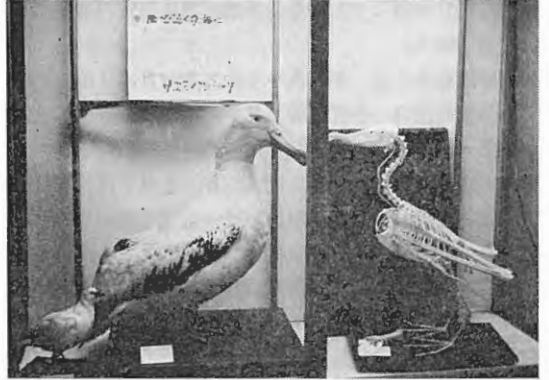
特別展「化石」



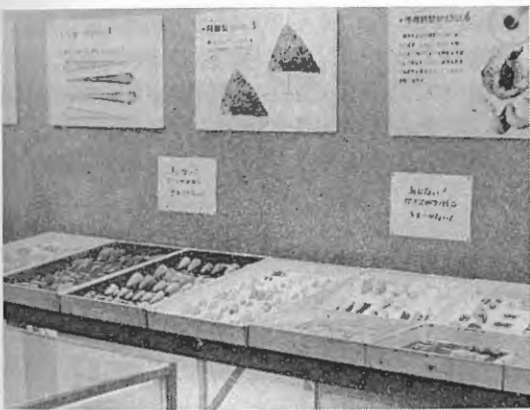
常設展 海藻のコーナー



特別展「貝の世界」



常設展 鳥のコーナー



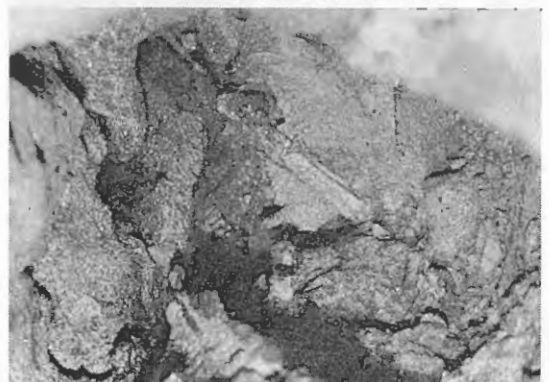
特別展「貝の世界」



美山洞窟群の調査 洞窟内で発掘作業中の隊員



常設展 沖積層のコーナー



美山洞窟群の調査 裂け目につまった獣化石

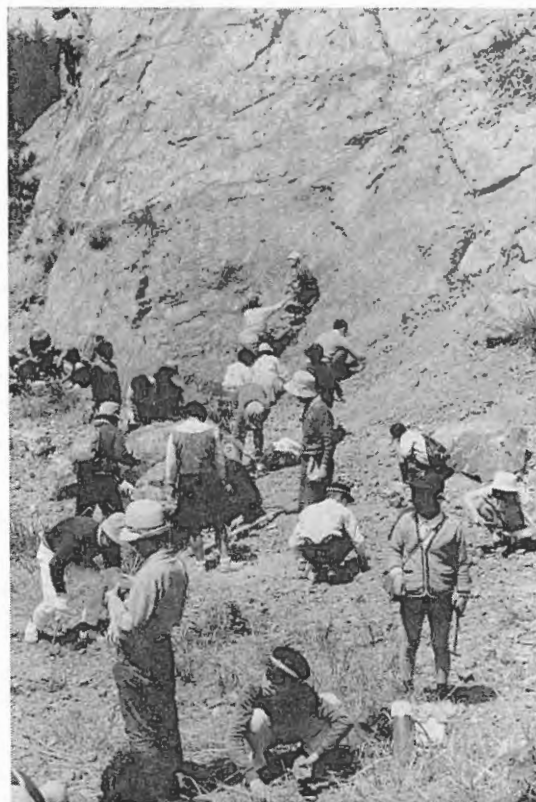


## 8. 普及指導事業

### 8-1 昭和40年度

#### A. 親子の自然をみる会

- 化石をさがす会 4月25日(日) 泉佐野市滝の池  
外部講師：日本貝類学会金子寿衛男氏 定員 100組
- 溪流の生物をみる会 5月16日(日) 三島郡島本町水無瀬川 定員 150組
- 磯の生物をみる会 6月13日(日) 和歌山市加太海岸 定員 100組
- 山の生物をみる会 8月12～14日(木～土, 2泊),  
8月16日～18日(水～金, 2泊) 奈良県吉野郡洞川 定員 200名。
- 鳥の声をきく会 7月3～4日(土～日, 2泊) 河内  
長野市岩湧山 外部講師：日本野鳥の会大阪支部松根  
元男・岡本恭治・真下弘3氏 定員 150名
- 虫の声をきく会 9月3日(金), 9月7日(火) 旭  
区城北公園～淀川堤 定員50組
- キノコ狩の会 10月10日(日) 神戸市兵庫区道場 外  
部講師：滋賀大学本郷次雄助教授, 大阪府立大学上田  
俊穂氏 定員 140名
- 鉱物をさがす会 11月7日(日) 川西市多田神社 外  
部講師：日本鉱物趣味の会真鍋鶴松氏 定員 200名



親子・化石さがし

参加59組, 大人82名 小人95名 計 177名

- 小さな世界をみる会(顕微鏡観察) 12月5日(日)  
館会議室 定員40組 参加36組, 大人37名 小人50名  
計87名
- 動物の冬ごしをみる会① 1月23日(日) 大東市野崎  
～経寺 定員50組 参加者42組 大人58名 小人65名  
計 123名
- 動物の冬ごしをみる会② 1月30日(日) 八尾市高安  
山参加者51組 大人61名 小人88名
- 博物館をみる会 3月27日(日) 館 外部講師：豊  
中市児童館石原忠一氏定員なし 参加者 大人29名  
小人32名 見学後父兄母親のみに対し石原氏の「子供  
の発育段階と自然教育」という講演および座談会  
周知方法として前年度同様5万枚のビラを印刷し, 市  
立小学校に送り, 児童一人一人に配布を依頼した。通知  
希望者は年間11枚のハガキを館にあづけ, それにより通  
知した。期間館以来ずっと普及事業を担当していた辻本  
修氏の年度中途の退職により担当者の空白状態が生じ,  
若干の混乱を生じた。

#### B. 一般人対象

- 植物採集会 8月7日～8日(土～日) 兵庫県神崎郡  
大河内町川上～砥の峯 定員50名
- 講演と映画の会 6月19日(土) 東区伏見町4 三  
和銀行7階ホール 講演「国立公園と植物景観」：大  
阪市立大学吉良竜夫教授 映画：日本の国立公園序編  
および北海道編, 定員 300名
- 標本同定会 8月29日(日) 館講堂 外部講師 名  
：
- 虫の声を聞く会 9月9日(木) 八尾市高安山々上  
外部講師：佐藤納氏 定員50名
- コケの観察会 2月27日(日) 京都市桂西芳寺(庭園  
見学)と松尾神社裏(採集) 外部講師：植物分類地  
理学会中島徳一郎・服部植物研究所児玉務2氏 定員



親子 谷川の動物しらべ

なし 参加21名(雨天のため)

- ミドリシジミ越冬卵採集会 3月13日(日) 枚岡公園 外部講師:日本鱗翅学会川副昭人氏 定員なし 参加者87名

## 8-2 昭和41年度

### A. 親と子の自然をみる会

- 谷川の動物をしらべる会 4月24日(日) 河内長野市 鬼住石見川 定員50組 参加45組 大人52名 小人65名 計117名
- 同上 5月8日(日) 同場所 参加28組 大人33名 小人38名
- 寶石さがしの会 5月15日(日) 上の太子〜二上山 定員50組 参加44組
- 秋の野草をさぐる会 11月6日(日) 旭区城北公園〜淀川堤 参加者51組 大人51名 小人75名 計126名
- 小さな世界をみる会 12月4日(日) 館講義室 定員40組 参加28組 大人28名 小人40名 合計68名
- 動物の冬ごしをみる会 12月11日(日) 大東市野崎〜経寺 定員50組 参加41組 大人40名 小人63名 計103名

昭和39・40年度と参加希望者が多過ぎて消化しきれなかったため、本年は年度頭初のビラ配布をやめて、毎回名学校宛の通達・新聞・Nature Study・館内掲示、による通知にのみを行なった。そのため常連が多くなり、利用者数が減少した。

### B. 一般人対象

- 野鳥の声をきく会 6月18〜19日(土日, 1泊) 河内長野市岩湧山 外部講師:日本野鳥の声大阪支部松根元男・真下弘・千原国男3氏 定員60名 参加者大人25名 小人24名 計45名
- 鉱物採集会 7月24日(日) 京都府相楽郡加茂町和東町 外部講師:大阪府科学教育センター内井道夫氏・日本鉱物趣味の会真鍋鶴松氏 定員50名 参加者33名
- 樹木のみわけ方を中心とした植物採集会 8月4〜6日(木〜土, 2泊) 兵庫県神崎郡大河内町川上〜砥の峯高原 定員60名 参加者28名
- 標本同定会 8月28日(日) 館講堂 外部講師20名(前田保夫・真鍋鶴松・紺田功・大橋邦宏・梶山彦太郎・金子寿衛男・八木沼健夫・永井正身・溝口修・芝田太一・木村裕・桑島正二・小山三郎・児玉務・中島徳一郎・松本邦夫・浅葉清・上田俊徳・野村稔・堀勝)
- 蝶の軟化展翅技術講習会 1月29日 館会議室 外部講師:科学趣味センター溝口修氏 定員40名 参加者13名

以上のほか、Aでは虫の声をきく会を4回、Bでは1回企画していたが、担当者日浦学芸員の公傷入院のため中止した。

## 8-3 昭和42年度

### A. 親と子の自然をみる会

- 化石をさがす 4月23日(日) 泉佐野市滝の池 定員100組 参加59組 205名
- 谷川の動物しらべ 5月14日(日) 河内長野市天見流谷 外部講師:日本生態学会谷幸三氏 定員100組 参加87組 229名
- 同上 5月21日(日) 橋本市紀見峠根古谷 定員120組 参加89組 262名
- 小さな世界をみる 6月11日(日) 館会議室 定員30組 参加30組 87名
- 化石をさがす 6月4日(日) 泉佐野市滝の池 外部講師:日本地質学会前田保夫氏 定員150組 参加160組 432名
- 同上 6月11日(日) 同場所 参加126組 346名
- 山の生物を見る 8月6〜8日(日〜火, 2泊)・8月9〜11日(水〜金, 2泊)・8月12〜14日(土〜月, 2泊) 兵庫県養父郡関宮町大久保〜鉢伏山 外部講師:港崎小学校永瀬幸一氏 定員210名
- 秋のなく虫かんさつ 9月14日(木) 羽曳野市道明寺 定員30組 参加32組82名
- 同上 9月16日(土) 同場所 参加29組70名
- 同上 9月19日(火) 同場所 参加24組64名
- 同上 9月20日(水) 同場所 参加22組58名
- 秋の蝶かんさつ 10月22日(日) 富田林市喜志 外部講師:日本鱗翅学会川副昭人氏 定員50組 参加者42組 105名
- 赤トンボ採集 11月5日(日) 泉南郡岬町淡輪 外部講師:関西トンボ談話会尾花茂博士 定員50組 参加者46組 122名
- 生物の冬ごしを見る 2月4日(日) 豊能郡能勢町吉川 定員50組 参加35組79名

年度当初に各小学校宛下記のようなビラを配布し、学童への手交方を依頼した。“お父さん・お母さんといっしょに、山をあるいたり、虫をつかまえたりしませんか? 自然科学博物館では、小学校上級生とその父母がいっしょになって自然観察をするもよしを、今年も8回ひらきます。くわしい内容を知りたい人は、自分の住所・氏名をかいいたハガキを8枚いっしょに封筒にいれ



同 定 会 風 景

て、博物館に送って下さい。館ではそのハガキを使って、毎回くわしい開催方法をお知らせします。その通知をみたうで、もよおしに参加したい人はその都度申込んで下さい”。

その結果4月中に1,600組を上廻る家庭からハガキが預けられ、毎回定員の3～6倍の参加希望があった。(最高は谷川の800組で、理想的な定員は50組である)こうした市民の要求にこたえるため、化石採集会は3回、山の生物を見る会も3回、なく虫の会は4回というように回数を増加して消化をはかったが、なお多くの家族を失望させる結果となった。1家族の平均参加回数は2回である。しかしこれ以上の増回は学芸員の人手不足と出張旅費不足のため不可能であり、当局の善処が望まれる。

#### B. 一般人対象

- 地質見学会 5月21日(日) 南河内郡太子町春日～香芝町閑屋 外部講師:大阪府科学教育センター内井道夫氏 定員50名 参加13名
- 鉱物採集会 5月28日(日) 京都市大文字山 外部講師:鉱物趣味の会真鍋鶴松氏 定員50名 参加28名
- 岩石薄片製作講習会 6月25日 館会議室 定員30名 参加者27名
- 偏光顕微鏡使用法講習会 8月1～3日(火～木) 大阪府科学教育センター(我孫子町) 外部講師:センター阿部正宏博士 定員40名 参加者44名
- びわ湖・比良山の自然をさぐる会 8月4～5日(金～土, 1泊) 大津市堅田浜, びわ湖青少年の家および

び比良山 外部講師:梶山彦太郎 および 前田保夫氏(大阪自然科学研究会評議員) 定員120名(大阪自然科学研究会との共催) 参加者119名

- 標本同定会 8月27日(日) 館講堂 外部講師20名(前田保夫・真鍋鶴松・大橋邦宏・紺田功・平野昌繁・黒子浩・内藤親彦・芝田太一・林靖彦・木村裕・溝口修・野村英世・梶山彦太郎・金子寿衛男・上田俊穂・堀勝・松本邦夫・児玉務・西本裕・近藤浩文) 同定依頼者 628名
  - 虫の声を聞く会 9月13日(水) 八尾市高安山上 定員50名 参加20名(台風のため)
  - 森林植物園見学会 10月22日(日) 神戸市立森林植物園 外部講師:神戸市公園緑地課丸山一夫氏 定員50名 参加者28名
  - シダ植物講習会 11月12日(日) 箕面谷及箕面第1中学校 外部講師:箕面一中村田賢三氏 定員50名 参加者18名(雨のため)
  - 沖積層貝化石採集会 12月3日(日) 館および地下鉄4号線本町駅工事現場 外部講師:日本貝類学会金子寿衛男氏 定員40名 参加者83名。
  - コケ植物採集会 1月21日(日) 京都醍醐山 外部講師:服部植物研究所児王務氏 定員なし参加者43名
- C. その他、大阪市立中央図書館の依頼により小中学生向き図鑑類のうち優秀なものをえらんだ。その内容は参考図書選定目録その2として中央図書館より刊行された。

## 9. 自然科学博物館条例および規則

### ○大阪市立自然科学博物館条例

制定 昭32.10.24 市条例38  
最近改正 昭39.3.19 市条例6

#### (設置)

第1条 本市に自然科学博物館(以下博物館という。)を設置し、その名称及び位置は、次のとおりとする。

名称 大阪市立自然科学博物館  
位置 大阪市西区靱2丁目

#### (目的)

第2条 博物館は、自然科学及びその応用に関する調査研究を行なうとともに、その普及指導に当ることを目的とする。

#### (事業)

第3条 博物館は、前条の目的を達成するため次に掲げる事業を行なう。

- (1) 実物、標本、模型等(以下博物館資料という。)の収集、保管及び展示。
- (2) 自然科学に関する調査研究及び博物館資料の保管、展示等に関する技術的研究。
- (3) 展覧会、講習会、実習会、研究集会等の開催及び

#### 指導。

- (4) 博物館資料の同定、貸出及び交換。
- (5) 学校、博物館、学会その他の関係機関との連絡及び協力。
- (6) その他必要な事業。

#### (職員)

第4条 博物館に、館長その他必要な職員を置く。(施行の細目)

第5条 この条例の施行について必要な事項は、教育委員会規則で定める。

#### 附則

- 1 この条例は、公布の日から施行する。
- 2 大阪市立自然科学博物館設置条例(昭和27年大阪市条例第30号)は、廃止する。

#### 附則(昭39.3.19市条例6)

この条例は、昭和39年4月1日から施行する。

### ○大阪市立自然科学博物館規則

制定 昭32.10.24 市教委規則16  
最近改正 昭39.3.31 市教委規則2

#### (開館時間)

第1条 自然科学博物館（以下博物館という。）の開館時間は、午前9時から午後5時までとする。但し、都合により伸縮することがある。

（休館日）

第2条 博物館の休館日は、次のとおりとする。但し、都合により変更し又は臨時休館することがある。

- (1) 月曜日。
- (2) 国民の祝日。
- (3) 資料の整理及び点検日（毎月末日。但し、その日が前2号の休館日に当る場合は、その前日）。
- (4) 資料の手入期（毎年約10日間）。
- (5) 12月28日から翌年1月4日まで。

（資料等の利用）

第3条 資料及び施設の利用にはついては、教育長が定める。

（入館の制限）

第4条 次の各号の1に該当する者に対しては、入館をことわり又は退館させることがある。

- (1) 伝染性の病気にかかっている者又は精神に異常があると認める者。
- (2) 他人に迷惑をかける行為をする者又は他人にけん悪の情を催させる者。
- (3) 資料又は施設を損傷する虞があると認める者。
- (4) 他人に危害を及ぼし若しくは他人の迷惑となる物品又は動物を携行する者。
- (5) 管理上必要な指示に従わない者。

(6) その他支障があると認める者。

（損害賠償）

第5条 資料又は施設を損傷し又は滅失した者は、教育委員会の指示によりこれを原状に復し、代物を弁償し又はその損害を賠償しなければならない。

（資料等の寄贈及び寄託）

第6条 博物館に、資料等を寄贈若しくは寄託し又は寄託の返還を請求しようとする者は、品目、員数、価格、住所、氏名その他必要な事項を記入して教育委員会に申請しなければならない。

（寄託資料等の取扱）

第7条 寄託を受けた資料等は、特別の契約がある場合のほか、博物館所蔵のものと同じ取扱をする。

（寄託資料等の免責）

第8条 寄託を受けた資料等が、災害その他の不可抗力によって滅失又は損傷した場合、本市は損害賠償の責を負わない。

（施行の細目）

第9条 この規則の施行について必要な事項は、教育長が定める。

附 則

- 1 この規則は、公布の日から施行する。
- 2 大阪市立自然科学博物館規則（昭和27年大阪市教育委員会規則第17号）は、廃止する。

附 則（昭39. 3. 31市教委規則2）

この規則は、昭和39年4月1日から施行する。

## 附 大阪自然科学研究会

附-1 その生いたちと現況

附-1-1 会の設立一本会は昭和30年5月2日大阪市立自然科学博物館後援会として発足した。本会設立の発起人は次の各氏である（敬称略）

池辺展生・井上茂治・今村荒男・上野益三・金子睦夫・川村多実二・木口伸和・北川久五郎・伏見康治・真島利行・三木茂・宮道馨・村上正巳・森田淳一・吉田真雄（世話人代表）佐藤納

当時、当館は大阪市立美術館内の1室を借りうけて、職員2名と無給嘱託教名が館の事業を行っていた。このような状況にあつて、本会の会員の積極的な援助と協力が、大阪市立自然科学博物館の資料収集・普及活動等の事業を支えていた。

本会は発足と同時に普及誌「Nature Study」を刊行し、会員に配布をはじめた。

附-1-2 名称の変更一大阪市立自然科学博物館が現在位置に移転し、館屋も独立し職員組織も一応整備されたのは昭和33年1月である。この時期以後、館の事業は急激に増加し、利用者も多くなり、従って会員数が増加すると共に、会員も小中学生から

一般市民、専門家に至るまで多くの層が含まれるようになって来た。会は従来のような後援会というよりは、むしろ、館を中心とした同好会あるいは友の会的性格を強く帯びるようになった。

このような状況に応じて名称を大阪自然科学研究会と改めた。（昭和33年4月）

附1-1-3 会の現状

会 長：和爾俊二郎

副会長：千地万造

会員数：A 会 員 214

B 会 員 663

賛助会員 10

Nature Study 通巻 167号を発行

附-1-4 現行規約

大阪自然科学研究会規約

（名称及び事務所）

第1条 本会は、大阪自然科学研究会といい、事務所を大阪市自然科学博物館内に置く。

（目的）

第2条 本会は博物館の事業に協力して、楽しく自然を

研究し自然科学の普及発展に寄与するとともに、会員相互の親睦をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は次の事業を行なう。

- 1 博物館の事業に協力する。
- 2 月刊誌“Nature Study”を発行する。
- 3 随時、会合を行なう。
- 4 その他本会の目的達成に必要な事業を行なう。

(会員)

第4条 本会の趣旨に賛同する個人及び団体は会員となることが出来る。会員の種類は次のとおりとする。

- 1 名誉会員 評議員会が推せんするもの
- 2 特別会員 評議員会が推せんするもの
- 3 賛助会員 本会を特に援助する団体または個人で年額1口5,000円を納めるもの。
- 4 A 会員 会費年額1,500円を納める団体又は個人。
- 5 B 会員 会費年額600円を納める個人。

本会の会員が会費を滞納したときは退会したものと認める。

(役員)

第5条 本会に次の役員を置く。

- 会長 1名 評議員会が推せんする。  
副会長 2名 評議員会が推せんする。  
評議員 若干名 会員の中から総会において選出する  
委員 若干名 評議員の互選による。本会の庶務・会計・事業の3部門を分担執行する。  
会計監査 2名 評議員会が推せんする

(顧問)

第6条 本会に顧問若干名をおく。顧問は会長が委嘱する。

(会合)

第7条 本会は次の会合を開く。

総会、会長が年1回召集し事業報告、会計報告、役員選出を行なう。

評議員会、会長が、必要の都度にこれを召集し、会務を協議する。

委員会、原則として月1回開催する。

(会員の特典)

第8条 会員は次の特典を受けることが出来る。

- 1 博物館の諸指導行事の通知をうける。
- 2 団体会員は講師指導者の派遣を求めることが出来る。
- 3 博物館の資料(標本・図書・写真・図版等)器具の借り出しのあっせんを受けることが出来る。
- 4 “Nature Study”の配布を受ける。

5 その他博物館で種名同定・研究指導諸種の便宜を受けることが出来る。

(会計)

第9条 本会の経費は会費、寄付金、その他の収入をもってあてる。

会計年度は、1月に始まり12月に終る。

(規約の改廃)

第10条 本規約は、総会において改廃することが出来る(付則)

この規約は昭和43年3月16日から施行する。

附1-2 昭和42年度の事業

●昆虫植物採集会 能勢吉川～初谷～妙見山上 7月16日(日) 指導:渡辺正・永瀬幸一・脇川秀子各評議員および瀬戸・日浦学芸員。参加者53家族約100名。予備調査を6月8日に行なったのちに集中豪雨があり登山道がずたずたに切断されていたため、歩行困難を訴える老婦人が1名出た以外は、まずまずの催しであった。

●びわ湖・比良山の自然観察会 8月4・5日 大津市堅田の真珠工場見学、今堅田の浜で淡水貝殻採集、高島郡高島町萩の浜、大阪市びわ湖青少年の家に1泊、梶山氏よりびわ湖産貝の見わけ方講習、前田氏より比良山の地形と地質についてのお話あり、翌日大山口より比良登山、採集。観光バス2台使用、参加者119名(大人53、小人66名)指導者:梶山彦太郎・前田保夫・生谷義一・野田評議員、小山三郎会員、日浦学芸員。テキストとして梶山氏執筆の「琵琶湖及び周辺の貝類」作製。博物館と共催。

内容の充実したすばらしい催しであった。ただ宿舎が不適當であった。

●六甲山地質見学会 12月17日(日) 夙川駅～甲陽断層見学～大社中学ラリックス層および中学校の学石園見学～芦屋スラスト見学～鷲林寺橋断層見学。約12km歩く。指導:前田保夫評議員・日浦・瀬戸学芸員、参加者27名。

●早春のハイキング 3月3日(日) 和泉市北信太駅～信太山～蔭涼寺 ニホンアカガエルの卵がたくさんみつきり、子供たちは大喜びで飼うためにもちかえった。参加者77名。指導:渡辺正評議員、柴田・瀬戸・日浦学芸員

●座談会「大阪の水にすむ生物のうつりかわり」

大阪の自然の破壊が急ピッチで進められているので、その変遷史を記録しておくため、第1回の試みとして、評議員による座談会をひらいた。3月2日午後。出席者18名。速記録は目下整理中で5月以降のNature Study誌にのる見込。





---

# ANNUAL REPORT

of the  
Osaka Museum of Natural History  
for the year  
1965-1967

Utsubo Park, Nishi-ku. Osaka, Japan.

---